

ユキ(三)

松永ひろし

一、海の男たち

東の山からのぼった日が、さらにのぼって、あたりがより明るく輝いたころ、麻衣を着て、裸足のユキと、すでにユキの丈より半分以上大きくなったオカミのハヤテは、背の高いススキの原の細道を南へ歩き、やがて松の木々が帯となって横に連なる砂浜に出ました。松の間に見える深い青色は、松林をぬけると、さえぎるもののない群青一色となってパースと目にとびこんできました。

「うわっ、おどろいた。ウミってやたらでっかいな目の前、いちめんの青い水だ。ほかにはなにもない。見たらサキもおどろくだろうね」
とユキがいうと、

サキねえは、ウミの水ってしょっぱいといって

たけど、ウミの風もしょっぱいね。

とハヤテがかえしました。

ザザザザツ　　ザザザザツ　　ザザザザツ

白い砂浜に海の水が波となり、音をともなって寄せていきます。

ユキはその波を両手ですくってなめ、ハヤテは波に鼻をつけてなめました。が、

「うわっ、しょっぱい」

ケゲツ、すくしょっぱい。

ペッ、ペッ

思わず砂浜に唾をはいたのでした。

砂浜の右手の先は、褐色の岩山で、尾根には丈の低い松がまばらに生え、左端は海の中にせり出しています。岩山の下の砂浜にちいさな小屋が見えます。

「なんの小屋だろう。いつてみよっや」

あいよ。

「いま、気づいた。砂浜って歩きにくいな。指の力が砂にうまくつたわらない感じだ」

おいらは、ほとんどいつもどおりだ。四本足で

目次

一、海の男たち	1
二、トイチの市場	5
三、どろぼうだ!	8
四、山 賊	13
五、着物娘に出会う	19
六、人さらい	22
七、左衛門耐屋敷	25
八、風雪の竜巻	35
九、椎の木村	36
十、飯綱山の山賊	40
十一、連の役所	42
十二、一夜山の山賊	45
十三、かつらの峠	48
十四、修験者たち	53
十五、これも天狗になる修行	60
十六、双頭の竜	63
十七、決戦 赤竜 対 緑竜	70

歩いてるからかなあ。

「そうかもね。おいらみたいに、歩くと足先が砂にうずまないもの」

砂浜の歩きにくさと足裏にじんわり伝わる熱さを感じながら小屋についたユキは、板壁の隙間から中をのぞきました。

小屋の中は間仕切りのない一間で、砂地の中ほどにユキの頭半分ほどの丸石を輪の形にならべた炉がありました。その周りに戸板三枚が敷かれ、その上に目の粗い網や丸められた麻衣や白い帯や木桶や木箱などが雑に置かれているだけで、だれもいません。と、ハヤテが、

ユキねえ、海の方から波音とはちがう音がする。

といいました。ユキは海へ目を移し、耳をすませました。

たしかに、ザザザツ、と聞こえる波の音にまじって、か細くなにやらの音が聞こえてきます。音はしだいに大きくなり、そして海に突き出た岩尾根の先端に、小さな木舟が姿をあらわしました。そして、ギーツ、ギーツ、ギーツ

と、きしむ音をたてて小屋にむかってきます。

木舟には五人の男がいて、二人ずつ左右の船べりに腰をおろし、一人が舟の後方で長い棒のようなものを動かして舟を進めてきます。男たちは皆、はだか、日に焼け、腰から股に白い布をまきつかせています。舟が波打ち際に近づくと、男たちは五人とも舟をおりて海にはいり、舟を押し浜辺に上げると、小屋の横まで押してきました。ユキは、

「このうちは」といって遠慮がちに木舟に近づくと、舟底をのぞきこみました。大きな魚や小さな魚、いろんな色や形の魚がたくさん積み重なっています。

「女わらし、どこのわらしだ」と男の一人がユキにたずねました。大きな丸い目の無精髭のおやじです。髪はざんばらで、歳は五くらいでしょうが。

「おいら、ハナサトムラのユキだ。これはオオカミのハヤテ」

「おっ、オオカミか。どつりででかいな」

「この魚、おとつたちがとってきたのかい」

「そうだ。釣りあげた」

「ユキはスクの釣り方を思い出し、小さな竹の棒でかい？」

とききました。

「小さな竹の棒？ なんじゃい、それは」

「イワナを釣る道具」

「魚を釣るのは、この針さ」

「魚を釣るのは、舟底の魚を横にどけて、丸く曲がった細い針金をつまみ上げました。」

「大きい針だね。えさはカエルかい」

「海にや、カエルはいねえ。フジツボの身で最初の魚を釣り上げ、その魚を切り分けて餌にするんだ」

「へっ、それにしてもたくさん魚だね。この魚どうするんだい」

「市場で売るさ」

「市場ってどこにあるんだい」

「これから行くが、ついてくるか」

「うん、ついてく」

はだかの男たちは小屋の中で麻衣を身につけたあと、二人が小屋の裏手から木車を引いてきて、木舟

に横づけしました。次に、一人が小屋の中から、

丈の低い大きな木桶をかつきあげて来て木車にのせると、木舟に乗り込んだ二人が舟底の魚をつぎつぎに木桶に投げ入れました。と、

「おっ、いけねえ。こりゃあだめだ」

舟の中の一人が手にした魚を波打ち際まで投げすてました。

「おっ、どうしてだめなんだい」

とユキがきくと、

「毒だ。ボクって魚でな、毒があるんだ。身の二切れもたべりゃあ、おだぶつだ」

「ええっ?!、こわいな」

「ああ、こわい。それがな、いかにも毒があります。姿だといいんだが、なにげねえ恰好の魚だから、客はまず見分けられん。売る前に見つけて捨てるのが、おれたち、お客あつての漁師だわい」

船底の魚がすべて木桶に移ると、男の一人が荷台の前に入って横棒を引き、残る四人は木車の横を押ししました。が、魚の重みで、車の木の輪が砂にうずみ、難儀しているようにユキには見えました。そこ

で、

「おとつたち、押すの手伝おうか」

とユキがいうと、

「女わらし、やめとけ、腕を痛くするぞ」

「おいら、他のもんの役にたとうと旅しているんだ。手伝うよ」

「いつが早いか、木車のつしろについてたユキは、グイッと木車を押ししました。とたん、

わっ！

横棒をもった先頭の男が棒ごと地面からもちあがり、

「おっ?!」

横で木車を押していた男たちバタツバタツと前にたおれました。

「おいおいおい」

「女わらしー、なにしゃがった」

「こめん、ちょっと力が強かったみたいだね。こんどはかげんするね」

いわれて男たちはおどろきの顔でユキを見ました。そして、

「女わらし、どえらい力持ちだが、われは魔性の子か」「鬼か」「もののけか」
 とたてつづけにききました。ユキはしばらく考えて、「おとうたちはフユヒメさまを知ってるかい」と逆にたずねました。
 「フユヒメ？ 知らんな」「知らん」「知らんぞ」
 「あのね、フユヒメさまは雪と氷と寒さで北の国を守る神さまなんだ。おいら、フユヒメさまの妹の子」「なんだって?! なら、われも神さまか」
 「たぶん。だからちよっぴり力持ち」
 「へえっ」

男たちはまじまじとユキをみました。でも目の前にいるのはまちがいなくニンゲンの姿をした、ふつうの女わらしです。木車の横棒を引いていた男が、考えても分からんとばかりに、
 「そうかい、そうかい、わかった、わかった。じゃあ、力持ちの神さま、すまねえが、おれに代わって木車を引いてくんねかい」といったので、ユキは、
 「いいよ。木車はおいらだけで大丈夫だから、おと

うたちは、うしろについてきてね」
 という荷台の前に入り、軽々と木車を引きました。「ええっ?!」

男らのおどろきの声に気をよくしたハヤテは、
 「オーン。」

「つみじかく吠えて、ユキを追いしました。おーい、神さま。そんねに速くいくくなって」
 男たちもユキを追いかけました。

二、トイチの市場

ユキの背丈をこえるススキの中につづく道は、木車がそこそこ通れる幅がありました。進むとススキの原はとぎれて、青菜が茂る畑があらわれ、またさらに進むと、緑の穂が出たばかりの田んぼが広まりました。道は木車がすれ違えるほどに広くなり、やがてさらに広くなった道の先に、大勢のニンゲンが見えてきました。それは道の両側に並ぶ出店で品物売ったり、買ったりしている衆たちで、賑やかな声が飛び交っています。連さまの屋敷の前の三八

市より、ずっとずっとたくさんのお店が並んでいきます。

ユキは木車を引いて出店の前を進み、店と店の間が空いた場所に木車を止めました。追いついた漁師たちは、

「神さま、大助かりだ」

「ありがと、ありがと」「てえしたもんだ」

などといい、木車の横棒の下に木箱を置いて荷台を平らにしました。それを待っていたかのように集まった客が、

「その赤いやつをおくれや」

「おいらはこのめめめめしたやつだ。焼くとうまいんだぜ」

「船頭、ボタはいねえだろうな」

「その、でけえやつをくれ」

などといつて、銭を出して思い思いの魚を買っていました。

「ユキは無精舎の漁師男に、

「お、お、この市場はいつといつ開くんたい」
 とききました。

「毎日だ」

「毎日？ きまった衆が店を出すんかい？」

「うんにゃ、きまつてねえ。売上金から勧進元にトイチで所場代を払えば、だれでもここで商売ができる」

「トイチってなんだい」

「銭十个もつけたら、一個を勧進元に払うってことさ。神さまは、なんか売れる物があるんかい」

「おいら、狩人なんだ。ノウサギをとって売ろうかな」

「ノウサギか。ここにはいないぞ」

「シカは？」

「いないな」

「ここらにいるケモノってなんだい」

「馬や牛だな。もっともそれは、家々で畑や田んぼ仕事のために飼っている動物だ。野生じゃあないわ」

「おいらが売れる物はないわけか」

「残念だったな」

すると、かたわらで「このやり取りをきいていた三

十くらいの小太りの女房が、
「ちよいと、女わらし。狩人だったら弓を引けるよ
ね」

と声をかけてきました。頭に手ぬぐいをかぶり、青
い魚をのせた竹ザルを右脇にかかえています。

「うん、できるよ」

「だったら、カラスを射落としておくれでないか。

ひとつでいいんだ。銭五個で買うよ」

「カラスを買ってどうするの」
とユキがきくと、

「おらの畑にカラスが近よれないように竹竿の先に
吊るすさ。あいつらは頭がいいから、仲間が死んだ
場所には近よらないんだ」

「へえ、いいよ、射落とすよ。おっかあの畑っ
てどうだ」

「うちはよ」

女房は野菜畑の中の小道を、西に見えるムラに向
かって歩いていきました。ユキとハヤテがついてい
くと、歳とつた男が土を掘り返している畑で、十五、
六羽のカラスが、掘り出されたミミズやオケラなど

を競ってあさっています。そして、前方の家々の
屋根のてっぺんにもそれぞれ二十あまりのカラス
が、何かを待つかのように一列に並んでいました。
（このらのカラスはニンゲンがこわくないみたいだ）
とユキは思いました。

先に行く女房が振り返り、道横の畑に顔を向けて、

「ここはおらの大豆畑、あつちはサクランボ畑だ。
そうだね、二つの畑用に、カラスは二つお願いでき
るか」

「うん、いよ」

ユキは、一番手前の家から三十歩ほど離れたところ
で、革袋からエビラを出して矢を二本いれて背負
いました。さらに弓を取り出すと、女房が訊ねまし
た。

「小さな」だね。屋根まで届くかい」

「うん、だいじょうぶ」

と応えてユキは、左手にもった弓を素早くカラスに
むけ、すばやくエビラの矢をつかみ、

ビュッビュッ

と射ると、矢は一直線に飛んで二羽のカラスの胸を

突きぬけ、二羽とも屋根のむこうに転がり落ちまし
た。と、

ガアーツ ガアーツ

屋根のカラスがいつせいに飛び立ちました。

「へえ、女わらし、すごい腕だねえ」

そういつて目を剥いた女房でしたが、思い出した
ようにカラスを拾いにいき、しばらくして戻ってく
るよ、

「女わらし、いんぐさつた」

と、ユキの右手に銭十個をのせました。

「おっかあ、ありがと」

「うちはそありがとだよ。女わらし、これからど
うするんだい」

「決めてないけど、おいらたち、困っている衆の力
になろうと旅してるんだ。おっかあは、カラスの他
に困ってることはないかい」

「カラスの次ぎはネズミだね。ともに作物を食い荒
らすでなあ」

「ネズミかあ、こいつは小さくてすばやいから手強
いなあ」

「なのでおらは猫を二匹飼ってな。それでおらの
家にはネズミはおらんが、家のまわりでは、うるち
よるしてぬ」

「ネ」ってなんだい」

「ネズミを捕まえるのがうまい生き物だ。ほら一匹、
家から出てきた。あれが猫だ」

それは子犬ほどの生き物で、丸い顔の鼻の横に、
細長いひげがピンと十本ほど生えていました。長い
尻尾が立ち上がり、ゆらゆら動いています。

と、猫はハヤテを見つけ、足を止めました。そし
て背中を丸めて前足を突っ張り、毛を逆立てました。
あきらかにハヤテを警戒しています。

「おっかあ、ネコはハヤテが気になるみたいだから、
おいらたちは立ち去るね」

「気をつけて旅しなよ」

「ありがと」

三、とらぼうだー

市場にもどったユキとハヤテは、出店の品物を見

て歩きました。いろいろな野菜が並び、餅や川魚や木の実やキノコもあります。衣、刃物、火打石に火打金、鍬、斧、さらにユキには何に使うのかわからない金属の道具がいっぱいありました。

と、そのとき、

「ごぼつだ。おい、捕まえてくれ、ごぼつだ」と叫ぶ男の声がありました。声の方を見ると、男衆や女衆の間を縫うように走って来る子ども姿がありました。男の子です。ユキよりいくぶん大きな子で、両手で何かを腹に押しあてています。

「ごぼつだ」

の声で、男の子を捕まえようとする者もいますが、その手を巧みにすりぬけて、すごい速さでユキたちの方に走って来ます。

「ユキねえ、どうするの。」

「子どもだし、なにか訳がありそうだ。見のがそうや」

男の子はユキの横をすり抜けて、だれにもつかまることがなく、海の方に走り去りました。

「ユキねえ、ニラの匂いだ。あの子がもっていた

のはニラの食べ物だ。

「なぜニラなんだ。よし、ハヤテ、男の子を追おう」

あいよ。

ニラの匂いをたどったハヤテは、砂浜の松林の中にぼつんと一つある、崩れかけた屋根の小屋をつきとめました。

「ユキねえ、この中だ。」

「ユキはうなずき、小屋の戸の前に立ちど、

「おい、はいるぞ」

と中に声をかけました。

「だれだ」

男の子の声が返ってきました。

「ハナサトムラのユキとオオカミのハヤテだ」

「オオカミだって、そんなものはだめだ。入ってくるな」

「おまえ、いまごぼつしただろう。なんで、そんな悪さをしたんだ」

「……」

声はありません。ふたたびユキが、

「なんで、ごぼつをしたんだ」

と強くいった時、

「お兄ちゃんをいじめないで」

小屋の中から舌たらずな女の子の声がありました。

「お兄ちゃん、わたちのために食べ物をもってきてくれたんだから」

ユキは小屋の戸をひきました。戸はすなおに開き、砂の地面に置かれた魚網の上で、あの男の子とちいさな女の子が丸く平べったい食べ物をお口にしています。が、はじめられたように男の子が立ち上がり、女の子を後に隠して、

「オオカミなんて怖くはないぞ。ほんとだぞ」と強がりました。

「そうか、わかった」

とユキはハヤテを伏せさせ、その横にあぐらをかいて座りました。そして、

「今、食べているのはなんだ？」

とききました。それには答えず男の子は、

「おれを捕まえに来たのか」

と、いいました。

「いや、すががし」

バン

と戸が勢いよく蹴開けられ、外に五、六人の男衆の姿がありました。

「やい、小僧」

そういつて頭に鉢巻をまいた若い男が肩を怒らせて戸口から小屋の中に入ってきました。が、足先で伏せているハヤテに気づいて、あわてて外に飛び出しました。そして、

「やい、小僧、出てこい」

と怒鳴りました。

「タケトは出なくていいよ。おいらが出る」

そう答えてユキは立ち上がり、戸口から外に出ました。ハヤテが続くと、男たちはあとささりして、身構えました。若い男が、おびえた声で、

「やい、女わらし、われは盗つとのなかまか」

というので、ユキは、

「ちがうよ。タケトがなぜニラセンベイを盗んだのか、そのわけを知りたくて追ってきたんだ。ユキに食べさせたかっただけ、ゼニがなかったんだって」

「銭がねえって、そんなこと理由になるか。銭がね

えから盗んでよけりゃあ、世の中、ぜんぶの商売あがつたりだ。稼ぎが減った分だけ小僧を仕置きせにゃあ、気がおさまらねえ」

と息巻きました。ユキは、

「あにい、盗られたニラセンベイのゼニはいくつだと訊ねました。」

「聞いてどうする」

「おいらが払う」

「払うだと、払えるかあ、銭十個だ」

「なら払える。さっきカラスを射落としてゼニを買ったし、ノウサギを売った残りのゼニもあるから」

「ユキは背中の革袋をおろして、銭のはいった革袋を出し、

「あにい、ここにきて手え、出してくれ」

といいました。

しかし、男はハヤテが怖いらしく近よってきません。そこでユキは男の前に行き、手のひらに銭を十個のせ、さらさら二つのせて、

「あにい、これで勘弁してやってくれ」

というので、

「おつ、おつ、わかった。やい、小僧、女わらしに感謝しな、二度と泥棒するんじゃないぞ」

といて、男たちと戻って行きました。

「ユキとハヤテが小屋の中に戻ると、健人が口をひらきました」

「オラが頼んだわけじゃねえから、礼はいわねえよ」

「いいさ、おいら、困ってるモンの役に立つと旅してるからさ。でも何故、ゼニも持たずに妹とここにいるんだい」

タケトはうつむいて黙ったままです。

「おまえたちのムラはどこなんだい」

「……」

「ユキなら知ってるかい」

「……」

「よわったね、顔を知られたから、もう市場で盗みは出来ないし、いつか飢えて死んじゃうよ」

すると結花が、

「あたい、死にたくない」

といつたので、ユキは、

「そつだよな、だれも死にたくないかないよな。で

もお兄ちゃんもなににも教えてくれないからおいら、どうしようもできない。せめて住んでいたムラを覚えてもらえば、聞きに行ける。そしたらお兄ちゃんがだまつていても、ここに居るわけが分かるかもしれないんだ」

というので、結花が、

「あつちから歩いてきたの」

と自分のうしろを指差しました。

「西の方だね。どのくらい歩いてきたの」

とユキがきくと、結花は右手を開いて左手で右手の親指を折り、それから人差し指を折り、

「これだけ」

と言いました。

「二日も歩いてきたのか、何もたべないで」

とユキが言うと結花はコクンとうなずきました。

ユキは立ち上がり、背中の革袋を砂に下ろしました。そして中から餅が入った革袋と銭の入った革袋を取り出し、さらに火打石と火打金と麻の細紐を取り出すと、

「タカトは火を起せるか」

とききました。健人は、首を横に振りました。そこでユキは火打石に火打金をぶつけて火花を出して見せ、

「タケト、やっつてらん」

と道具をわたすと、興味がわいたのか健人は受け取って、何度も火打石から火花を出しました。

「つん。後は燃やすものだね。外には松の枝がずいぶん落ちてたし、浜には打ち寄せられた木や板があったから拾ってくる」

といってユキは外に出ると、しばらくして枯れ枝や流木を抱きかかえてもどってきました。さらに再度外に出て、ススキの穂を抱きかかえて帰りました。

「タケト、火はこつやっつて起こすんだ。見てな」

ユキは左手でつかんだ火打石の上に麻紐をのせ、人差し指でおさえました。次に火打金で火打石を打って火花を出し、数回繰り返して麻紐に火種をつけ、その火種を、束ねたススキの穂の中に入れ、ふっと息を吹くとススキの穂が燃え上がりました。その火で枯れた松の小枝を燃やし、さらに太めの乾いた流木を燃やしました。

それからユキは、革袋から四角い餅を十個取りだすと、地面に置き、そのうち四個を燃えている木のそばにおきました。

やがて焼ける餅のいい匂いがしてしてきました。

「ユキは餅をつまみあげ、手で砂を払って、

「ほら、食べな。熱いから吹いてさまして」

と健人と結花にわたすと、二人は熱いにもかまわず、いきおいよく餅にかじりつきました。

「はいよ、ハヤテ」

とハヤテの口に餅を渡したユキは、餅を食べながら、

「おいら、この子たちのムラにいつて、二人がムラを出たわけをきいてくる。その間、ハヤテはこの子たちを守っておくれ」

あいよ。

ユキは、銭が入った革袋を健人に握らせ、

「タケト、餅を食べきったらこの銭で市場にいつて、餅でもニラセンベイでも買いな」

といいふくめました。

四、山賊

「ひゃあー」

老人はその速さにびつくりして声をあげました。

夕暮れ前、ユキが走りをとめたのは、低い山を背にした、四つの家の燃えあとでした。木が焦げた匂いが漂っています。昨日か、一昨日の火事にちがいありません。

「あーい、だれかいるかあ」

と声をかけながら一番手前の家に近づくと、道に血を流したニンゲンが倒れていました。それも一人ではありません。ここにも、ここにも……。

麻衣に焦げた痕はなく、首や腹を切られて死んでいます。ユキは、何者かがこの村を襲い、火をつけ、村の衆を斬り殺したみたいだと思いました。

（ひゃあーことをするな。ゆるせな）

（もしかして、タケトとユキはこのムラの子っ）

しかしそのことを聞くにも村の衆は殺されています。

ユキは夕闇の中をさらに西に走りました。そして闇の向こうに家々の建物があらわれると、家から外

ちいさな男の子と女の子が二日ばかりで歩いた道のりも、ユキが走れば日の暮れる前につくはず。す。風を巻き上げてユキは走りました。す。い速さで近づき、す。い速さで走り去るユキを目にした衆は、驚き、目を見開いて見送りました。二十あまりの村を走り抜けると、低い山を背に広い田がひろがる里があり、一つの家の前で薪を割る老人がいました。

「ユキは走りをもめて近づくと、

「おじい、このムラにタケトとユキというちいさな兄妹はいないかい」

とたずねました。薪を割る手をとめてユキを見た老人は、

「「に」もあ、いねえな」と応えました。

「なら、この道を東にあるいていく男の子と女の子を見なかつたかい」

「おお、見た、昨日だ。二人で歩いて行った」

「ありがとつ、おじい」

「ユキがふたたび走り出すと、

れた大きなケヤキの樹に体を寄せて眠りました。朝になつたら、いずれかの家をたずねて、隣りの村が襲われたわけを聞くつもりでした。

軽く右肩を叩かれて、ユキは目を覚ましました。明るい斜光を背に、一人の娘がユキを見下ろしています。頭に布をかぶり、麻衣と麻の袴を身につけて、稲わらを編んだ沓を履いています。

「女わらし、なしここ寝てるっ」

「ユキは立ち上がりました。そして逆に、」

「あねえは、タケトとユカという、兄妹を知つてるか」

とききました。

「ああ、知つてる、隣りの櫓の木村の子だ」

「隣りムラって、あつちの焼けたムラかい」

「そうだ。一昨日焼き討ちされたんだ。去年、あの村の田んぼはイノシシの群に襲われて、ほとんど米がとれなかった。だが、山賊はそんなこと知らんから、貢ぎ米を出し惜しんでると思つて、一昨日村を襲つたんだ」

「サンゾクってなんだい。ミツギマイってなんだい」
「山賊は山などを根城に、旅人の銭や荷物をうばつたり、村をおそつて食べ物や娘をうばつていくやつらのことだ。貢ぎ米ってのは、そんな山賊から村を守つてくれる別の山賊に、お礼で渡す米や味噌や酒などの食い物のことだ」

「ミツギマイを払えんかったからつて家を焼き、村の衆を殺すなんて、サンゾクって悪いやつらだな」
「ああ。見せしめさ。ほかの村々に脅しをかけたんだ。ところで女わらし、何故、健人や結花を知つてるんだ」

「海辺の小屋で出あつたんだ。丸一日の間にも食はずに歩いてきたつていつた」

「そうかい、あの兄妹は助かつたんだね。でも気をつけな。生きていると知つたら、やつら、どこまでも殺しにいくからね。襲つた村は皆殺しにするのがやつらの掟なんだから」

「その時はおいらが守る」

「さいさな女わらしが守れるもんかね。あいてはでつかい男がころころいるんだ」

「でも、守る」

二人の声をききつけて、十人ほどの村の衆が集まつてきました。その男の一人が、

「女わらし、守る守るつて、何を守るんだ」

と聞きました。ユキは、タケトとユカにはふれず、

「おいらの旅の目的さ。困っているモンの役に立つつて」
とをを守るんだ」

「それはすごいな。見上げたもんだ」

「あ、い、山賊の根城つてどこにあるんだい」

「ひゃ、あ、くわはらくわはら。そんなおつかねえ」

「と、おらに聞くな。殺されちゃう」

と、男は集落のほうに走り去りました。

「ユキは先ほどの娘に向かつて、」

「あねえ、いろいろありがと。おいら、ぜったいに守るわ」

と言つて海辺の小屋へ走り出しました。すると、

おーっー

走り去るすさまじい速さに村の衆から驚きの声があき起りました。

「ふじんのニンゲンじゃねえ。あの子だったら守る

かもしんねな」

と娘がちいさく口にしました。

走りとおしてユキが海辺の小屋にもどつたとき、小屋の中では粗朶が燃え、その周りで餅が4つ、焼かれていました。

「やあ、タケト、火を起こせたんだね。すごいな。」

とユキが口にする、健人は顔をゆるめました。

みんなで餅をたべたあと、ユキは健人にいいました。

「タケト、ムラの名を教えなかったのは、サンゾクがこわいからだね」

健人が小さくうなずきました。

「ユキねえ、サンゾクってなんだい。」

とハヤテがたずねました。

「よそのサンゾクからムラを守つてやるから」
「ユメやミノなどのミツギマイを出せと脅すやつらだ。タケトのムラは去年、イノシシの群に田があらされて、ユメがほとんど取れなかつたさうだ」

健人がまた小さくうなずきました。

「だからミツギマイを出せなかったんだけど、出し惜しみだと勝手に思ったサンソクは、おととい、タケトのムラを襲って家を燃やし、ムラの衆を殺したんだ」

サンソクって、ひどいやつらだな。

「ああ、ひどいやつらだ。襲ったムラはかならず皆殺しにするそつだ。タカトとユカが生きていると知れば仲間が殺しにくる。そつだね。タケト」

唇を噛んで健人がうなずきました。

凶暴さは、シキミはあ以上だな。ユキねえ、それでどうする。

「タケトがゼニをかせげる技を身につけるまで、おいらたちが一緒にいて守るっていうのはどうだい」

いいねえ。どんな技を教えるんだい。

「昨日、ハヤテも市場で見ただろう。捕まえようとした衆をつぎつきにかわして、すごい速さで走って来たタケトを」

うん、見た。なら、狩人かい？

「そつ、狩人。素質はじゆうぶんだ。けど、この辺りにはエモノはいないそつだから、もっと山の方で、

近くに大きなムラがあるところがいいな」

じゃあ、そんな場所をさがしにいこうや。

「うん。まずは市場で食べ物を買おう」

そついつてからユキは、目の前の二人にむかって、

「タケト、ユカ、二人はおいらたちがかならず守る。タケトには狩人の業を教える。だから、一緒に旅をしないか」

といて立ち上がり、革袋をかつぎました

ハヤテが立つと健人が黙って立ち上がり、それを見て結花が立ち上がりました。

小屋を出たユキは背の革袋を砂の上におろし、中から矢を二本と弓取り出し、矢の一本を健人に握らせました。そして、

「タケト、狩人は弓でエモノを倒すんだ。見てな」

といて弓に矢をつがえ、三十歩ほど離れた松の木にむけ弓をひきしほりました。

ビュッ

カッ

放たれた矢は松の幹に突き刺さり、ユキが、

「タケト、やってみな」

といて健人に弓を渡すと、健人はなれない手つき

で弦に矢をつがえ、ユキの矢がささる松をむかつて弓をむけ、矢を放ちました。しかし、矢は松の手前の砂浜に力なく落ちました。

「うん、方向はいい。初めてにしては上でさだ。だいいじょうぶ、だんだん強い弓を引けるようになるよ」とユキがいつと、

「うん」

健人が目を輝かせてうなずきました。

ススキっ原を抜けて市場にいくと、昨日のニラ煎餅売りがユキたちを見つけて手をふり、

「女わらし、昨日はありがとよ。ニラ煎餅買わないか」

と声をかけて来たので、ユキは男のニラ煎餅を八枚買いました。さらに餅売りの店で餅を二十個買いました。そしてハヤテを先頭に、健人、結花、ユキと続いて広い道を東へと向かいました。

その道は市場を離れると次第に細くなり、両側の家が数少なくなつて、稲田ばかりの頃には、木車がやっとすれ違えるほどの幅となりました。

ときどきうしろを見ていたハヤテが、

ユキねえ、ユカが歩き疲れたみたいだ。おいらに乗るようにいっとくれ。

といました。

「わかった。ユカ、ハヤテに乗りな」

とユキがいつと、結花は首を横に振りました。

「ハヤテがこわいのかい」

ときくと、頭を下げました。

「だいいじょうぶだよ、ハヤテは大きいけど、とってもやさしいんだよ」

といて結花を抱き上げ、ハヤテの背にのせました。結花はすぐさま両手でハヤテの首に抱きつきました。

ユキは健人に話しかけました。

「どうして二人だけ、助かったんだい」

健人はしばらく黙っていましたが、やがて一言、

「家にいなかった」

と言いました。

「なぜ？」

「小川で魚をつかまえてた。そしたら北から燃えた

木をもって馬にのる男たちが見えたんだ。だから、草藪の中に隠れた」

「そうか」

「でも、おとうも、おつかあも、早紀ねえも殺された」

ユキは言葉に詰まりました。なぐさめの言葉さえ、いまの健人にはつらいものに思えました。

黙って歩きつづけ、ナラ林の中を進んでいくと、西山に日が落ちました。

ユキたちは、一本の大きなケヤキの木の下で、火を燃やし、餅を焼き、言葉少なに食べました。そして、地面に足を投げ出し、ケヤキによりかかって寝ました。

五、着物娘に出会う

チュルチュルビー チュチュチュユツ

チーチー ヒーホホヒイ ヒーホホヒイ

ヒイーヒホホヒイ ヒイーチツチツ

小鳥の声がナラ林のあちこちから聞こえ、東の山

から日がのぼりました。

目を覚ましたユキは、伏せつて横に眠るハヤテに小さく声を書けました。

「ハヤテ、起きたかい」

おはよう、ユキねえ。

「この林にはエモノがいそうだから、おいらひとつ走りてくるよ。その間、タケトとユカを見ていておくれ。二人とも昨日の歩き疲れで、すぐには起きないだろうけど」

あいよ、わかった。

ユキは革袋からエビラを出して矢を三本入れて背負い、弓をもって北へ走りました。

(ノウサギがいるといいな)

しばらく走った林の中にはユキが両手を広げたくらいの、丸い湧き水の池があり、チロチロとかすかな音をたてて左の方へ流れていました。

(これは上出来だ。これでエモノが多ければ、ここに狩りの小屋をつくらう。さあ、エモノ探した)

ユキが、地面をドンドン踏んでさらに先へ走ると、目の先で、ドングリを集めていたリスが、左に走つ

て木の幹をスルスルスル登って幹のつしろに隠れました。さらに右奥で一匹のノウサギが飛びだしました。

(いたー)

空気を裂いてユキが全力で走ると、落ち葉が舞い上がりました。すぐさまノウサギに追いついたユキは一矢でエモノを射止め、

(さっきの池でノウサギをさばくことにしよう)

池に戻ったユキは、池端にノウサギと弓矢を置くと、ハヤテのもとに走りました。

まだ眠たそうな結花をハヤテの背にのせ、湧き水の池についたユキたちは、手分けして朝飯の用意にかかりました。ハヤテと結花は粗朶や枯れ枝を集め、健人が火を起こして粗朶と枝を燃やし、餅を四つ焼き火に近づけて置きました。

ユキは池の水が流れる先で、ハヤテの短剣を使ってノウサギの皮をはぎ、肉を切り分け、分けた肉は、麻糸で縛り、焚き火に近いナラの木の一番下の枝に並べて吊るしました。

餅が焼けると、健人は火から放して、しばし冷ましてから、それぞれに配りました。ユキは長い枯れ枝を使って焚き火の火を吊るした肉の下に移し、炎のすぐ上に肉の塊があるよう、吊るした麻紐の長さをなおしました。

餅を食べ終えた結花が、

「肉はまだ焼けないの」

と訊ねました。ユキは、

「まだまだ。健人と結花のは、この大きい後脚だから、さらにまだまだだね」

「はやくたべたいなあ」

ユキは焚き火の炎がそれぞれの肉のすぐ下になるよう枯れ木をくべていきました。やがて、肉の焼けるいい匂いがあたりをただよった。

「もういいんじゃない」

と健人がいい、結花も、

「わたし、焼けたと思つ」

と催促しました。

(しかたないな)

という顔で、ユキは、吊るした麻紐をほどき、健人

と結花に焼けた後脚の肉の塊を手わたしました。二人はうれしさを顔をくしゃくしゃにすると、足先の細いところを両手でもって、大きく厚いももにかぶりつきました。

「つめえー」「おいちい」

「ゆっくりたべな」

と聞いて、ユキはハヤテと前脚の肉を一つずつ食べ、のこりの肉はじっくりと焼いて、フキの葉でくるんで皮袋にしまいました

腹が満足したあとは、出立です。

ナラ林を抜けると、木車が行き違いできる広さの土道が、ユキの背丈の倍もあるススキの群れの中にのびていました。

その道の先に、一つまた一つと、刈り取ったススキの束で壁や屋根をこしらえた家があらわれ、ススキの原が途切れた道沿いには稲穂の田んぼや板壁と山形屋根の家があらわれました。

さらに道は広くなって、たくさん家が建ち並ぶ大きな集落に入ると、道はずっと向こうまで一直線に延びて、交わる道もまっすぐ左右にのびていま

た。そして四本目に交わった道は、なんと木車十台が並んで通れるほど広く、家々の前には出店が並び、たくさんのお客が品物を売ったり買ったりしていました。それらの多くの者は麻衣を着ていましたが、北からユキたちの方に向かってくる、若く背が高い娘は、萌黄色の地に鮮やかな緋の花模様様の衣を赤い帯で結んでいました。ユキは、娘のまわりだけ、別の世界があるように思いました。

それで、娘が目の前にきたとき、声をかけました。

「あねえ。きれいな衣だね」

すると娘は、

「ありがとつ。これは西の国からの貢ぎ物なの。わたしたちは着物って呼んでるわ」

「キモノかあ。麻衣に比べてすいぶん軽そうだなあ。なにでできてるのかな」

「蚕の繭の糸で織ったものだよ」

「カイコってなんだい」

「桑の葉を食べて育つ蛾の幼虫のこと。カイコはさなぎになる前に口から細い糸をだして自分のまわりを囲むそうよ。その細い糸をたくさん集めて太い糸

にして、布を織織るの。その布を仕立てたものが着物」

「へへえ。そんなめずらしい物を着ているあねえは、なにものだい？」

「わたしは王さまの官女」

「カンジヨ？」

「王さまやお妃さま、王子さまや王女さまたちをお世話するじもえよ」

「オウさまって、ムラジさまみたいなのかい」

「連は王さまが任命するの」

「ぶ〜ん、オウさまはムラジさまより偉いのか。だからこんなたくさんさんの家があって、たくさんさんのニンゲンがいるんだね」

「そつ、」

「ムラではなくてミヤコかあ」

「おまえたちは、どこからきたの」

「おいらは、北のハナサトムツからだよ」

「そのちいさな女の子もかい」

と訊かれたユキは、

「そうだよ、疲れたらハヤテに乗って旅して来たの

さ」と村の名を教えない健人を気づかいました。

「ハヤテっていうのかい、すいぶん大きな犬だね」

「あねえ、ハヤテはオオカミだよ」

「ええつ、ほんとうかい、怖いね」

「だいじょうぶだよ。ほら、」カが乗っていてもおとなしいだろ。ところであねえ、このミヤコでおいちらちみたいの旅のもんが泊まれるところを知らないかい」

「旅人がよく泊まるのは、南大門のあたりだね」

「ナンダイモン？」

「この大通りの南にある大きな門で、都の入口だよ」

「ありがとつ、おいらたち、その門にいつてみる」

六、人ざらい

南大門は二階に欄干つきの回廊をめぐるせた、高く大きな楼門でした。一階にも二階にも、そして前後左右の広場にもたくさんのお客がいます。旅の衆といつより、家の無い衆が集まってきているように」

キには思え、怪しく危ない雰囲気を感じました。それでユキとハヤテが、

「ハヤテ、油断しないよ」

あいよ。

とたしかめ合ったときです。ユキたちの背後にそつと近づいた大柄な男が、突然、ハヤテに乗った結花を左脇に抱えこみ、前へ走って逃げました。

「ハヤテ、タケトをたのむ」

あいよ。

すぐさま追ったユキは、たちまち男に追いつき、追い抜き、両手を広げて男の前に立ちはだかりました。

「やい、ユカを返せ」

男はユキをちいさな女の子と見てあなどつたのでしよつ、舌なめずりして顔をゆがめ、

「いやだね。ちよつどいい、おまえもさらってやるつ」

といました。

「返さないと痛い目を見るよ」

「痛い目って、どんな目かい」

わしたユキは、跳び上がり、左足で男のあごを蹴り上げました。さらに長い髪が振り回す棒を右手の平で受けて奪うと、その棒で男を突き倒し、両手をひろげて捕まえにきた髭男は棒で両足を払って転がらせ、斧を振り上げ走って来たでぶ男は、二歩踏み込んで棒の先で男の眉間を突いて倒しました。

仲間四人が瞬時に倒されたのを見た細身の男が、右手の剣を振り回して走ってくる。ユキは男へと走り、男の目の前に棒を突き出して男の動きを止め、次には棒を男に向けたまま、すこい速さで男の周りを横走りしました。それはそれはさまじい速さでしたから、若い男は剣を身体の前でにぎったまま、頭をわずかに動かして目でユキの姿を追うのがやっとでした。

タッ！

足音も高く男の正面で足を止めた次の瞬間、ユキは棒で男の剣を空に巻き上げ、さらに体をくると一回転し、棒で男の右横腹を思いっきり打ったからたまりません。

ギャッ

そういつて、大きく目を見開いて男がユキに近づきました。つぎの瞬間、ユキはパツと地面を蹴って跳び上がり、右足で男のあごを蹴あげました。

ウツ

男は結花を抱く手を放し、うしろむきに地面にたおれて動きません。地面に落ちた結花が泣き出し、ユキは結花を抱き上げると、

「だいじょうぶだよ」

と背中を軽くさすってなださめました。

そのとき、後方から五人の若い男が走ってきて、ユキをとり囲みました。手に手に剣や斧などを持っています。剣をもった細身の一人が、

「野郎ども、女わらしたちをつかまえる」

と命じ、男たちが一斉にユキに襲いかかった瞬間、ユキは結花を抱えたまま地面を蹴って、男たちの頭上をはるかに飛び越えると、ハヤテのもとに走り、その背に結花を乗せ、

「ハヤテ、ユカもたのむよ」

というや、迫り来る男たちに向かって走りました。

目の前にきた男が横にはらった鎌をしゃがんでか

という声を残して男は空を飛び、遙か向こうの見物人の前に落ちました。

「おおつ。すい」

「なにものだ、あの女わらしは」

見守った衆からそんな声がかわきあがりました。

ユキがハヤテのそばに戻った時、

パチパチパチッ

と手を叩いて若い男が近づいて来ました。端正な顔に鼻髭をはやした背の高い男です。着流しの青衣の腰に長い剣をさしています。そして長い棒をもった鉢巻姿の男が八人あまりあらわれると、

「倒れているあの者たちを縛り上げ、牢につれてゆけ」

と命じてからユキに、

「みごと、みごと、女わらしながらあの荒くれどもに一步も引かぬ戦いぶり、この左衛門尉すっかり

感服した」

とおだやかな声でいいました。

「サエモンノジョウ？ あにいの名かい」

「そうだ、都を乱すの不貞の輩を取り締まる役人だ」

「フテイノヤカラってなんだい？」

「今のような人さらいや、ぬすつと、人殺しをする悪いやつだ。」

「あいつら人さらいか？」

「そつだ、子どもをねらつ、たちの悪い人さらいだ。」

「それを取り締まる役人なのに、なぜ見てただけなんだい。」

「あのものども、逃げ足が早くてな。わしらの姿をちよつとでも見ようものなら蜘蛛の子を散らすように逃げてしまつ。女わらし、よくあの男に追いついたな。」

「ユカがさらわれて、必死だったからね。」

「それだけか？ いまの、立ち合ひを見たわしの目には、それだけではないように思えたが……。まあ、よい。」

「どつだ、わしの家にこないか。」

「ハヤテとタケトとユカといっしょなら、いいよ。」

「よし、一緒にこい。」

「いって、左衛門尉は大通りを北にむかつて歩いていきました。すると事の成り行きを見ていた群衆が、女わらし、よくやつた。」

「人さらいをよくやつつけた。」

「とユキをねぎらう言葉が飛び交い、拍手がわきました。」

「ありがとう。」

「ちょこん、と頭をさげて、ユキはハヤテと健人と結花と左衛門尉を追いました。」

七、左衛門尉屋敷

左衛門尉の屋敷は、都の北にある朱雀門の前を右に折れて、百歩ほど歩いた左にありました。それは黒い板瓦がのる白壁の塀に囲まれ、扉が後方に開いた大きな冠木門の先の、柱の太さがきわだつ、がっしりとした建物でした。

丸く平らな踏み石が続く庭は、ツツジとサツキの株がこんもりつらなり、ナツツバキの白い花やヤマハギの赤紫の花やアジサイの青や紫の花がいまを盛りと咲いていました。

土間の玄関は、ユキが両手を広げた倍の倍ほどもあり、ぶ厚い板の踏み台の先につづく廊下は玄関の

幅のまま奥までのび、目の先には、全身に黄と黒の縞が互いちがいにあるケモノを描いた衝立てがありました。その衝立の手前で直角に左へ向かう廊下は、

玄関の幅の半分ほどのものでした。玄関に立った左衛門尉が、屋敷じゅうに轟く声で、

「奥よ、戻つたぞ。」

「いって、ほどなく奥から床をする足音が聞こえ、衝立の向こうに、桜色の地にクチナシの白い花をあしらった小袖を身につけた若い女の人が、萌黄に白花の着物を着た娘二人を供にあらわれました。その若い女の人は、左衛門尉が右手で差し出した剣を両手で受け取り、娘の一人にわたし、ユキたちを順に見て、

「旦那さま、この子たちははいずれの子ですか、とききました。」

「手前の子は、人さらいどもを打ちのめした女わらしだ。あまりにすばやい動きをするので、興味をわき、家に連れて来た。」

「それはそれは、女わらし、人さらいはこわかったぞ。」

と奥さまが訊ねたので、ユキは、

「こわいという思いはなかったよ、さらわれたのが、このユカだったから、ぜったいとりかえす気だった。」

と結花を見ていました。

「そつ、えらいのね。さあ、みんな、中にお入り。」

と奥さまがいい、左衛門尉も、

「そつだ、ついでにい。」

「いって沓をぬいで踏み台を上がり、左の廊下へと歩いてゆきました。ユキが、

「サエモンノジヨウさん、おいらたち、裸足だけど、

このままあがってもいいのかい。」

と訊ねると、左衛門尉は振り向いて、

「かまわん。あがつてこい。」

「ハヤテもかい。」

「いって、左衛門尉は笑って、

「だって仲間なんだから、その犬は」

「いって、ユキが、

「犬じゃないよ。ハヤテはオオカミだよ」と教える。

「おお、オオカミか。どえらい仲間だな」と驚き、目をむきました。

ユキはハヤテの足裏を手で払ってやってから、廊下の端に腰かけて自分の足裏を手で払いました。健人と結花がそれに習いました。

廊下の突き当たりは、百人ほどが座れるほど奥に長い板床の部屋で、入って右の板壁は、上部に明かり取りの格子窓があり、その下の壁は数段の刀かけが四つ並び、十五本ほどの木刀がかけられていました。

左側は、上部が格子窓で、下部は数本の柱と柱の間に二枚ずつ引違い戸がはまり、戸は一方によせられ、その先の光の中に板張りの廊下と植木が茂る庭が見えました。

部屋奥の板壁の前には一段高く上段床があり、藁を編んだ円座が一つおかれ、壁際には鹿の角で掬えた刀かけが控えています。

右壁の突き当たりで、引き戸を開けて中に入った左衛門尉が、藁の円座を五枚かかえて出てきました。そして一枚を上段床から五歩ほど離れたところに置

き、さらに三歩ほどの離れて円座を四つ、一列に並べました。最初の一枚に座った左衛門尉は、ユキたち座るようによい、座るのをまっつ、

「さて、女わらし、名を聞いてなかったが、なんと

いっ

と訊ねました。

「おいら、ユキ。ハナサトムラの狩人だよ」

「では、男の子、名はなんと申す」

しかし、健人は「たえません、それでユキが、タケトっていつんだ。ユカのあにいだ」と教えました。

左衛門尉は、

「子どもばかりで旅してあるようだが、ユキ、おとつやおかあはどうした」

「二人とも死んだ。ユンじいも死んでおいら、ひとりぼっちだ」

「健人と結花の親はどうした」

すると健人は、ユキを見て首を横に振りしました。(殺されたことを話すな)と合図したのです。なのでユキは、

「死んだとタケトに聞いた」

とだけいいました。

その時、萌黄の着物の娘二人が、黒光りする長机を部屋に運んできて子どもたちの前に置きました。さらに一人の娘が大きな竹ザルを両手で運んできて机にのせ、

「さあ、童たち、ウリを切ったからお食べ。泉で冷やしたウリだから、冷たくておいしいよ」とすすめました。

舟形に切られたウリの一つをハヤテに与えてから、ユキも一つたへると、甘くて冷たくて、思わず、「サエモンノジョウさんも食べなよ。おいしいよ」と勧めました。

結花と健人はというと、言葉を発することなく黙々と食べ、次のウリに手をのびました。

「こやかに笑んで子どもたちを見ていた左衛門尉が、ふいに、
「のう、親がいけないとは不憫じゃ。どうだ、この家に住むか」
といいました。」

「えっ?」

おもわずユキは、ウリを口から放し、結花と健人はげんな顔で左衛門尉を見ました。

しばしあって、ユキは一つ首を振ってから、きっぱりといいました。

「サエモンノジョウさん、おいら、困ったり、助けてほしい衆の力になるため旅してんだ。だからにこれからも旅をつづけるよ」

左衛門尉は一つうなずいて、

「そうか。健人と結花はどうじゃ、この家におらな

いか」
と訊ねました。二人は顔を見合わせました。ユキはちよつと心配になって、

「だけどサエモンノジョウさん、そんなだいいじなこと、奥さまと相談しなくていいのかい」

「都の、親のない子をひきとり育てることは、この左衛門尉のお役目の一つじゃ。だからむろん、奥は承知してあるし、すでに親の無い子が五人、この屋敷の長屋で暮らしておる」

「なら、タケトとユカの気持ちしただいだね。タケト、この家に残るか、それともおいらたちと旅をして狩人になるかい」

とユキが健人に訊ねると、健人は困ったという顔でユキを見ました。そのとき奥さまが廊下から部屋に入ってきた。左衛門尉が奥さまに、

「奥、この兄妹の両の親は死んだそう。どうやらユキは旅をしながら健人を狩人にしたいようだが、健人は見ての通りの子どもだ。結花はさらに幼い。旅の厳しさは容易に計り知れる。だから健人と結花はこの家であすかり、ゆくゆくは王様の家臣に思つのだが、どうじゃ」

という、奥さまは、

「旦那さま、お役目にななう、まことよきお考えと存じます。これ、名はなんと申す」

と二人にききました。

「健人」

と、これまで自分では名を名乗らなかつた健人がこたえました。さらに、

「これは妹の結花だ」

と訊ねました。

「ないよ。オオカミと戦つたときも相手にあわせて動いただけだ」

「そつか、だが、稽古をしておらずとも、手加減はせぬ。まいる」

いうが早いか、左衛門尉は右足を踏み込み、正面に構えた木刀をユキの胸へ突き出しました。その切っ先を後ろに跳びはねてよけたユキは、バツと地面を蹴つて左衛門尉の頭上へとびあがると一回転しながら木刀を振りおろしました。

ガキツ

左衛門尉が右膝を折つて体を沈め、左手で木刀の切っ先を握つてユキの木刀を受け止めた瞬間、ユキは身をよじつて左衛門尉のうしろにあり、振り向こうとした左衛門尉の右腕を木刀で軽くたたきました。

「痛い！ まいったあー！」

左衛門尉が大声を上げ、バツツと地面に両手をつきました。ユキは軽くたたいたつもりでしたが、左衛門尉にはすごい衝撃だったのです。

と続けました。ユキは分かりました。健人がこの屋敷に残ることを決めたのだと。そこで、

「サエモンノジョウさん、奥さま、二人をよろしくおねがいします。じゃあ、おいらたちは旅に出るよ」といつて立ち上がりました。すると左衛門尉も立ちあがり、

「ユキ、おぬし、ふつづのニンゲンの女わらしではあるまい。先の動きはまさに電光石火、鬼神もいかがかと思つものじゃった。どうだ、あの動きをい一度、わしに見せてくれぬか」

といって壁へ歩き、刀かけの木刀を一本にぎると、開いていた戸から廊下に出て、庭に飛び下り、

「さあ」

とユキを促しました。

「うん、わかった」

ユキは、いちばん短い木刀を手にすると、床を蹴つて一気に庭に跳びおり、左衛門尉に正対して、木刀を正面に構えました。左衛門尉も木刀を正面に構え、

「ユキは、剣術のけいこをしたことがあるか」

「速い、完全にまいった」

左衛門尉が頭をたれると、廊下で見ていた奥さまが、おどろきの顔で声をかけました。

「ユキや。旦那さまは決して弱くはないですよ。都の武術大会で毎年十数人を勝ち抜きます。それゆえ王さまから都を警備する兵部省の頭を任じられているのです。旦那さまが弱いのではなく、そなたがあまりにも強いのです。それには何かわけがあるのでありますか」

ユキは木刀を左手に持ち替えると、

「奥さまとサエモンノジョウさんは、フユヒメさまを知っているかい」

と訊ねました。

「知らぬのう」

と奥さまはこたえ、左衛門尉は首を横に振りました。そこでユキが、

「フユヒメさまは、雪と氷と寒さで北の国を守っている神さまだよ。おいらフユヒメさまの妹の子なんだ」

という、左衛門尉は、

「なんだって。ユキは北の国の神の妹の子だ？
いやはや、恐れ入った。勝てぬわけじゃ」
「いい、奥さまは、

「ユキ、神というものを初めて目にしましたが、ニ
ンゲンとかわらね姿じゃのう」

と、げん顔でいいました。なのでユキが、
「奥さま、フユヒメさまたち神さまって、ニンゲン
には姿が見えないんだ。でも、おいらの姿がだけが
みんなに見えるのは、おいらが生まれたとき、ハナ
というニンゲンのおつかあの血の雪が、おいらの口
に入ったからなんだ。その血の雪は、神さまへの恨
みと呪いと憎みが染みついた雪だったから、おいら
の神の力を封じこめたんだ。だから、おいらの姿は
ニンゲンに見える。フユヒメさまに近づいたら誰も
が凍って死んじゃうけど、おいらに近づいても誰も
凍らないんだ」

というと、奥さまが、

「ひええ、フユヒメに近づくと凍って死んじゃう
のかい。怖い、こわい」

と身を震わせたので、ユキは笑いしながら、

「奥さま、大丈夫だよ。フユヒメさまはまず北の国
から出ないし、この南の国へは絶対こないからね」
「いってから、うん、そうだ」とつなずき、

「ハヤテ」

と呼ぶと、廊下からハヤテがユキの前に跳び下りま
した。

「サエモンノジョウウさん、奥さま。このハヤテもフ
ユヒメさまと縁があるんだ。おとうのオーロラはフ
ユヒメさまの家来なんだ。その子だから、走ればお
いらよりずっと速いし、サナエさまからもらった短
剣を口にくわえて戦うんだ」

そういうとユキは部屋へ跳びあがり、革袋を肩に
かけて戻ると、袋から短剣を出しました。それをハ
ヤテが「ガキッ」とくわえると、左衛門尉が、
「おーう、勇ましいのう。それでどのようになら
んか」

と訊ねたので、ユキがハヤテに伝えました。

「ハヤテ、サエモンノジョウウさんはハヤテが短剣で
戦うところが見たいって」

ユキねえ、おいら、あそこのナツツバキの横に

行くから、サエモンノジョウウさんに、持っている木
刀を、おいらに向かって投げてもらっとくれ。

ハヤテがナツツバキに走りつくと、ユキは、

「サエモンノジョウウさん、玄関先のハヤテに向かっ
て、その木刀を投げとくれ」

といいました。

「いいの、あたると大けがをするぞ」

「ハヤテが、自分でそういったんだ。だいじょうぶ」

「そうか、よし」

左衛門尉は木刀を握った右手を大きくかつぎあげ
ると、ハヤテを目がけて力いっぱい投げおろしまし
た。

ヒュッヒュッヒュッヒュッ……

木刀は空気を裂いてハヤテに向かい、片やハヤテ
は木刀に向かって低く走り、パッと地面を蹴りまし
た。

カッ

と音がした瞬間、木刀が二つに分かれて空に飛び、
ハヤテが左衛門尉の前に身を伏せるや、

カラン カラン

と後方の地面に転がりました。

「おおっ」

左衛門尉が驚きの声をあげ、

「ハヤテ、ちゅっ」

と、廊下で結花が手をたたき、横で健人が両手のこ
ぶしを強く握りました。

一呼吸おいて左衛門尉がいました。

「ハヤテよ。稲妻のごとくに走り、強く首を振って
木刀を真つ二つにするとおそろしく怖い。ただ、

あまりにすごい、すごすぎる。ニンゲンの胸をねら
うならば、ハヤテの後に死人の山ができるだろう。

至難ではあるが、力の加減が要りよつであらう」

そこでユキは訊ねました。

「相手が悪いやつらでもだめかい」

「悪人といえども、わしはできるだけ殺さずにとら
えたいと思っている。あるいは再度と悪事をせぬよ
う、」らしめるだけにいたしたいくらいじゃ」

「ならハヤテは、悪いやつらにどんな戦いをすれば
いいのかなあ」

「うむ……」

と左衛門尉は腕組みして考えこみました。剣や槍や
鎌などで襲って来る相手のいずれをも、殺さぬよう、
考え考え、加減して立ち向かうことなどですこぶる危
険です。

「切りつける場所だな。手首を切り落とすというの
はどうかな」

と左衛門尉がいうと、

「グーッ」

と奥さまが悲鳴をあげました。そして、

「旦那さま、そんな怖いことをおっしゃらないでく
ださい。ほら、童女のアカネを思い出してください。
柿の木から飛び下りたときのことを。いたがったの
はもちろんです、足に力がいらず歩けなくなり
ましたよね。それは足の臛を切ったからです。でも、
しばらくするとアカネはなんとか歩きました。ハヤ
テ、足の臛を切るのです。臛を切られたら、その者
はもうまともに歩けなくなります」

というと、左衛門尉が、

「そうだ、足の臛だ。ハヤテ、足の臛とはここだ」
と、自分の右足のうしろのふくらはぎから足

首までを右手でなでました。

「ユキが、

「サエモンノジョウウさん、足のケンほどのくらい傷
つければ切れるんだい」

ときくと、

「皮の下を少し傷つけるだけで臛は切れる」

とこたえました。なのでユキはハヤテに、

「ハヤテ、サエモンノジョウウさんがいまさわってみ
せたケンという場所を切れば相手は動けなくなそう
だ。しかも表の皮の少し下を切りつけるだけでケン
は切れるそうだ」

わかった、じゃあ、おい、試してみる。ユキ
ねえ、おいらが切った木刀を、すこし放して地面に
刺しておくね。

そこでユキは、切られた木刀の一つをひろってそ
の場に突き刺し、もう一つを十歩ほど離れた地面に
刺しました。

再びナツツバキの横へ走ったハヤテは、振り向く
や、地面を蹴って跳び上がり、手前の木刀を足首の
高さまで切りつけ、地を疾走して次の木刀を同じ高さ

で切りつけました。そしてユキに向かっていいまし
た。

「ユキねえ、サエモンノジョウウさんに見てもらっ
ておくれ。」

「ユキは木刀二本を引き抜いて左衛門尉に見せまし
た。

「つむ、浅くなく、深くなく、見事な切り口。ハヤ
テ、上出来じゃ」

左衛門尉は感心しきりとばかりに言いました。

「ハヤテ、サエモンノジョウウさんは上出来だといっ
たぞ」

「うれしね。なによりうれしいのは悪いニンゲン
でも殺さないでやつつけられるってことだね。」

「そつだね。ニンゲンは殺したくないし、ケモノだ
って、むやみに殺してらんじやない。食べたり、売
ったりするためなんだ」

と、ユキは左衛門尉に訊ねました。

「都の悪いやつらは、こらしめてサエモンノジョウ
ウさんに渡せるけど、都から離れたところの悪いやつら
は、こらしめられないのかい」

「そうです、ユキは、健人のムラを襲った山賊のこ
とを思いにいれ訊ねたのです。」

左衛門尉は、

「王様の命により、都の外で、およそ三十六の村を
たばねるのが連じや。連が執務する役所は『衛』と
よばれ、兵舎を備え、武士が配されておる。ユキが
悪人を退治した時は衛を訪れ、報告すれば、役人が
召し捕りに向かい、牢に入れるであろう」

とこたえました。

「悪いやつらが三十人ほどでも『ガ』の牢は足りる
かい？」

「詰め込めばな」

「それ以上の悪いやつらをやつつけたら、どうすれ
ばいいの？」

「え、っ、それ以上？ ユキたちはそれ以上の数の
悪いやつを捕まえるとてもいいのかい。おそれいっ
たのう。その時は、都に連れてきて刑部省の役人に
渡すといひ」

「そつか、都にね。サエモンノジョウウさん、ありが
と、奥さま、タケトとユキをよろしくお願いま

す。ハヤテ、さあ、いこうか」
あいよ。

八、風雪の竜巻

左衛門尉の屋敷を出たユキたちが朱雀門手前の角を左に曲がったときです。門前の広場に目つき悪い男が十数人、剣や槍や鎌や棒などをもって立ちはだかつていました。遠巻きに多くのニンゲンが見ています。ユキが男たちをさけるように左に進むと、男たちも左に動いて、ユキたちの行く手を遮りました。なのでユキが、

「おいたち、おいらたちに用かい」
というと、麻衣を荒縄で縛り、抜き払った剣をもった裸足の若い男が唇をゆがめて、
「女わらし。おめえらが左衛門尉の家に入ったのを仲間が見届けてなあ、なので出て来るのをまっつたのよ。つかまった仲間の分も、たっぶり仕返しさせてもらふぜ。」
といいました。

ユキはハヤテを見ました。

「ハヤテ、早速、あの技を試してみるかい」
この広場はユキねえの竜巻向きだよ。ここはユキねえに、まかせよ。

「そうか」といってユキは、見物衆にむかって、
「人さらいの仲間でない者は広場から離れておくれ。おいらの竜巻に巻き込まれないように」
というと、見物衆はザワザワッと十歩ほどうしろに下がり、ハヤテは素早くきびすをかえす後に走りました。人さらいの男たちがユキを取り囲みました。
「竜巻だと、しゃらくせえ、女わらし、覚悟しろ」
と若い男は剣を振りかぶり、早足でユキに迫りますと、その瞬間、ユキは、左足を軸にして右足を蹴って回り、氷雪の竜巻を湧き起こすや、一番近い若い男を巻き込んで朱雀門のてっぺんの高さまで放り上げ、更に勢いまして竜巻を巨大にすると、人さらいの仲間たちをすべて竜巻の中に引き入れました。

ギャー、ギャー……
竜巻の中からの悲鳴があがり、やがて悲鳴が途だと、竜巻が、

ふっ

と消えて、ユキが姿をあらわしたとき、
ドサツ、ドサツ、ドサツ、ドサツ……
と男たちが空から地面に落ちてきました。
見ていた衆が、五人、十人とユキにかけよりました。そして、

「女わらし、今のはなんだ」
「われは、なにものだ」
「なして、あんなことができる」
と声をかけてきました。ユキが、
「おいら、ほんのちよっぴり今みたい事ができるんだ」
というと、腰の曲がった白髪のおじいが、

「ぬっほ、ニンゲンか」
と聞きました。
「うん、おいら、半分ニンゲン、あとの半分は北の国のフコトメさまの身内」
とユキがこたえると、ざわめきが起こりました。でも、だれ一人、フコトメを知りませんでしたから、おどろきは軽いもので、より深く探らざるもの

はいませんでした。ユキが、

「じゃあ、後はおねがい。おいらたちは行くよ」
というて南へ向かうと、見物衆は、激しいしもやけになって地面に横たわる男たちへ、
「おまえら、いい気味だ」
「悪さばかりしてたからバチがあつただ」
「これで懲りたろっ」
「女わらし一人にやられて、さまあねえや」
などというて、石を拾って倒れている男たちに投げたり、裸足で顔をふんずけたりしました。
「そっだ、左衛門尉さまにこの男たちのことをお知らせしてくる」
と、群衆の中から一人の若い男が走り出しました。

九、椎の木村

「さて、ハヤテ、これからどうする」
歩きながらユキがハヤテにたずねると、
「ユキねえの気持ちは決まってるんじゃないかい。タケトのムラにいって。」

「うん。家を焼き、ムラの衆を殺すなんてことは絶対にゆるせない。聞かされた時には、すぐにサンソクをやっつけたかったけど、タケトとユカのこと気がなつて、海の小屋に戻ったんだ。二人のことは大丈夫となったから、こんどはサンソクだ」
「ユキねえ、なら、急ごうか。おいらに乗ってくれ。」
「ありがと」

「ユキがハヤテにまたがると、ハヤテは西に向かつて疾風のように走りまわりました。そして日がかたむきだした頃、櫓の木村につきましました。焼け崩れた家々と地面に散らばる死体を見たハヤテが、

「ユキねえ、ひどいね。」
と、怒りをこめた声でいいました。

「サンソクってやつら、今、どこにいるんだろう。」

「ハヤテ、それを聞きに隣りムラへ」

「ユキとハヤテが走り着いた隣り村の東端には、色とりどりの布を結んだ青竹が何本もたてられ、周りに村の衆が集まっています。その中に、先日娘を見つけたユキは、後から近づいて、

「あねえ」

とよびかけると、娘が振り向き、

「あら、あの女わらしじやないか。どうしたね、でかい犬と一緒に」

「あねえ、ハヤテは犬じゃないよ。オオカミのハヤだ」

「ひえっ、オオカミ」

「大丈夫、ハヤテはむやみに襲わないよ。おいらたち、あねえに聞きたい事がある、やってきた」

娘はユキの手を引いて、村の衆から離れ、小声で、
「山賊のことかえ」

と聞きました。

「ユキは、こくと頭を縦に振り、娘は、

「やつらに聞かれたら、たいへんだ、この村でも通じてるもんがいるかもしんねから、気をつけなくちやなんね。おらの家においで」

といい、先を歩いていきました。

娘の家は、村の西外れの小川の端にあり、板壁に板葺き屋根の家でした。その表戸を開けると、狭い土間の先に、一段高く板の間があり、その真ん中の

炉で、燃え尽きた薪が炭となって、薄白い煙を立ちのぼらせていました。ハヤテが、

「ユキねえ、おいらはここにいます。」

と土間に伏せ、ユキは足裏を手で払い、娘に続いて板の間にあがり、背中の革袋を下ろして、娘に勧められた炉端の布の円座に座りました。娘はもう一つの円座にひざまずくと、鉄の箸で白い炭を持ち上げました。すると灰が崩れて、小さく火照る火が現れました。それを炉にもどすと、枯れ葉をかぶせて燃え上がらせ、そこに粗朶をのせました。

「ユキは革袋の中から餅を十個ほど取り出すと、

「あねえ、これ、つかってくれ」
と、いって差し出しました。娘は、
「このかい。ありがと」

と餅を一つとると、そのついで三つを脇の鉄鍋に入れ、炉の上の自在鉤の鉄の鉤にかけました。そして、

「女わらしは、なんでもつかうだけ、と訊ねました。」

「ユキだよ。ハナサトムラの狩人だ」

「そうかい、おらは椎の木村の文だ。あときユキ

は健人と結花を守るといってたけど、二人は、どうした」

「ミヤコのサエモンノジヨウさんが、二人をひきとってくれたんだ。ゆくゆくは王様の家来にするっていつてた」

「へえ、それはよかったね」

「さつき、外に竹の先から色の布をたらししたものがあったけど、あれはなんだい」

「雨乞いの道具さ。あす、村で雨乞いのまつりをおこなうんだ」

「アアコトイ」

「そ、その雨がふらないもんで、雨を降らせてくださいって、鎮守の森の神さまにお願いするんだ」

「お願いすると降るのかい」

「それはわからん。神のみぞ知るって世界だ。ほら餅がふくらんだぞ」

文は長い竹の箸で焼けた餅をはきんで、三つの土皿に一つずつのせ、一皿をユキにわたすと、もう一皿をハヤテの前へ置いて置き、戻ると円座に座って、

皿の餅を口にしました。

「ユキがききました。」

「フミねえはサンソクのこと、どのくらい知ってる？」

「ちつちつ、よその山賊から村を守ってやることによって貢ぎ米を要求するんだ。よその山賊はよその山賊で、ほかの山賊から守ってやるから、貢ぎ米をよこせと云ってくる。だから普通の村は、二二三つの山賊に貢ぎ米を払っている。」

「サンソクって、どのくらいの数があるんだ？」

「いくつあるかわかんねけど、この辺りは二つだ。一つは北の飯縄山を根城にしているやつら。もう一つはそれから西に山二つ離れた一夜山を根城にしているやつらだ。椎の木村はこの二つに貢ぎ米を払って。」

「ちつちつかをやっつけても、残った一つがさらなるミツギマイを迫るんだらうね。二つ一度にやっつけるしかないのかなあ。」

「やっつけるって、簡単じゃねえぞ。やつらは腕つぶしが強いし、数は二、三十もいるんだから。そ

れにユキは女わらしじゃないか。」

「でも、おいらもハヤテもすぐく強いんだ。フミねえ、このあたりに『ガ』というヤクシヨはあるかい？」

「南入半田歩いたと云う、二つを治める連さまの屋敷と役所があるけど、役人は山賊を畏れて、いくらか頼んでも二つの山には近づかん。椎の木村のことも知らん顔だ。」

「フミねえ、おいら、明日の朝、飯縄山へ行くよ。」

「ええっ？ 見つかったら殺されるよ。」

「気をつけるけど、二人や三人のサンソクには、おいらたち、負けないよ。」

文は、ユキの自信にあふれた言葉で、先日、目の前からすこい速さで走り去ったユキの姿を思い出しました。そしてこの女わらしにはふつつのニンゲンとはちがう力があるのかもしれないと思いました。

「ユキ、ハヤテ、今夜はここに泊まっていきな。おらはおともおかも死んで一人だけだ。遠慮はいらん。」

「ありがとう、フミねえ。」

十、飯縄山の山賊

翌朝、ユキとハヤテは飯縄山へと走りまわりました。ナラヤクヌギヤシイの雑木林は、やがて、杉やアカマツの森となり、森が途切れた中腹は、ぼっかり開いた広い草地で、数十頭の馬が三三五五、草を食んでいました。

草地の中ほどに、ユキの腰ほどの高さに土を積み上げ、ユキの背丈の三倍くらい板塀をぐるっと巡らした砦がありました。中央に望楼がそびえ、その周りに十五ほどの建物が、屋根から白い煙が立ち上らせていました。

望楼の上段に二、三人の男がいます。草地には隠れる物がありませんから、ユキたちが近づけばすぐ見つかってしまいます。

しばらく考えてから、「よしっ」とつぶやいてユキがハヤテにいいました。

「ハヤテ、馬たちを森にいれとくれ。おいら、竜巻でサンソクたちを巻き上げて落とすと決めた。」

「あいよ。ユキねえ、サンソクを一気に始末する気だね。」

「うん。」

「ユキがうなずきました。」

ハヤテが馬に向かって駆け、ユキは草原に踏み出しました。

すると望楼の男たちの動きがあわただしくなりました。

しばらくして、正面の板塀にある大きな扉が真ん中から後に開いて、二十人ほどの男が姿をあらわしました。いずれも頭に鉄鍋のようなものをかぶり、胸から腹に黒くて丸い板のような物をつけ、腰帯に剣をさしています。

一番前にいる背の高いひげ面の男が、歩いてくるユキに向かって、

「女わらし、何ゆえここにきた、殺されたいのか。」

と威喝の言葉を発しました。かまわずユキはさらに進み、

「おまえたち、ナラノキムラの衆を殺しただろ。だから返治にきた。」

「なに、わしらを、おまえが？ 退治だ」と
わあはっはっはっ

男たちがいつせいに大笑いしました。

「三平、どついつ事か、くわしく聞いてこい」とひげ面男が後をむいて言葉を発すると、ユキよりすこし背の高い、麻衣を着た男の子が、腰の剣を抜いて、ユキにむかつて歩き出しました。ユキは立ち止まり、背中の革袋を地面に置いて剣を取り出し、腰紐にさしました。すると、

おっ

と、男たちが身構えました。

三平は、両手で握った剣を前に突き出し、一歩一歩と進みますが、かんせんに腰がひけてます。

「三平、しっかりせんか。あいてはお前より小さい女わらしだ」

ひげ面男が叱咤しました。

その声で意を決したのでしよう、三平はユキへ走り、

やあっ

と頭上に振り上げた剣をユキに振り下ろしました。

その瞬間、ユキは右へ小さく跳び、右手で鞘から剣を抜くや、下から三平の剣をはねあげました。

カーン

三平の手をはなれた剣はくるくる空を舞って、門の後に並ぶの男たちの、目の前の地面に突き刺さりました。

おおっ!!

声があがり、

ザザッ

と、男たちが一斉につしるに下がりました。

剣をはね上げられた三平は、呆然と立ちすくんでいましたが、

「おい」

とユキが三平の目の前に剣の切っ先をのぼすと、

「わああーっ」

と悲鳴を上げて門に向かって走り、それとは逆に髭の男たちが剣を抜いて門から走り出^で、ユキをぐるりと取り囲みました。ユキが、

「サンソクをやめるといふなら許してやる。今のうち^にここから逃げな」

とこつと

「何をいつてやがる、それ、かかれえ」

ひげ面男が声を上げ、剣をふりあげた男たちが一斉にユキに切りかかりました。とたんユキは、高く跳んで門の前に降り立ち、左足を軸にして右足を蹴って回り、氷雪の竜巻をまきあげました。とたん、山賊たちは身をすくめ、後ずさりしましたが、氷雪の竜巻はさらに激しく巨大になって、男たちを一気に巻き込みました。

ギヤアーツ ウツギヤアーツ

響く悲鳴に、なにごとかとあやしんだ山賊たちがそれぞれ家から出てきました。が、巨大な竜巻を目にするや、あわてて家に逃げこみました。しかしユキの竜巻は、門と壁を壊して皆の中に入り、すべての建物ごと山賊たちを巻き上げました。

ギヤアーツ ギヤアアーツ

やがて悲鳴は次第に弱くなり、竜巻も薄れていき、ユキが姿をあらわしたとたん、

ドスツ、ドコツ、ドスツ、ドドツ……

山賊たちが壁板や柱などとともに空から地面に落

ちてきました。みな体じゅうひどいしもやけで、動

けません。

ユキねえ、すごいや、あつという間だねえ。

「よし、ハヤテ、ヤクシヨへいくよ」

あいよ。こいつらを捕まえておくれってか。ユキねえ、おいらに乗っとくれ。」

十一、連の役所

文が、役所は半日歩いた先、といましたが、ユキをのせたハヤテが森を抜けて原野を走り、田畑の中の道を疾走して、木造りの家々が集まる街の村につくのなさほど刻はかりませんでした。道の先に、一目で連の屋敷とわかる白堀を巡らせた大きな建物があり、閉まった表門の前で、腰に剣を刺し、右手で身の丈ほどの棒をもつ若い男が一人で立っていました。ハヤテからおりてユキが男に、

「あにい、ここはヤクシヨかい」

とぎくと

「おおそつだ。連さまのお役所だ。だからなんだ」

「おいら、イイツナヤマのサンソクをみんなやっつけたから、捕らえにいとくれ」

「なんだって、山賊を？ みんな？ おまえが？」

「うん」

「ほんとうか？」

「ほんとうだよ」

「ちよっと待って」

男は門の右横にある、ちいさな木戸を押し開けて中に入って行き、しばらくすると、木戸から顔を出し、

「入れ。連さまがお会いになるそう」

と告げ、手招きしました。

ついていくと、ムサキの生け垣の先に建つ屋敷の、大きな玄関の廊下に、うす水色の衣をまとい、顔立ちの整った若い男が立っていました。右横にはユキより少し大きな男の子が右手で剣を立てて持ち、立ち膝で従っていました。若い男が口を開きました。

「女わらし、飯綱山の山賊をやっつけたとはほんとうか」

「うん、やっつけた」

「役所の男どもでさえ手をこまねいているのに、女わらし一人に出来るはずなからう」

「なら、誰か、確かめにいかせておくれ」

「山賊は死んでいるのか、生きておるのか」

「生きてるよ。だけどみんなしもやけだし、高い所から落としたから、何人かは足を折ったり、腕を折ったりして動けないはずだから、召し捕りに行くときは木車をいっばい用意しとくれ」

「にわかには信じられん話だが……まずは調べにかそう。誰かおるか」

連が奥に向かって声をかけると、

「はい、連さま」

とこたえて二人の若武者が、ツツツと連の横に現れ、ひざまずきました。連が、

「信じ難い話だが、その女わらしが飯綱山の山賊を退治したそう。おまえたち、それがまことかどうか、確かめてまいれ」

と命じました。

「はい」

と、こたえて二人の若武者は、玄関の台石の左横に

並ぶ沓の中からわが物をはき、玄関を出て左手に走ると、しばらくしてそれぞれが茶色の馬に乗って玄関先にあらわれました。そして先頭の若武者が、

「女わらし、わしのうしろに乗れ」といいました。

「おいら、ハヤテに乗って行く」

といてユキがハヤテにまたがると、門番の男がかんぬきをぬいて表門を開け、ハヤテが門から跳び出すと、若武者の馬があとを追いました。

山賊營の周りでは、三十あまりの山賊がうめき横たわっていました。中には近づくユキたちの姿を見て逃げようとする者もいましたが、若武者がすばやく駆けより、腰につけた紐をほどいて、山賊を後手に縛り上げ、

「女わらし、これはおまえ一人のしわざか」

と若武者の一人が、驚きを隠せない顔でいいました。

「うん、そうだよ。死なない程度の氷雪の竜巻で巻き上げて落としたんだ」

「そんなことができるのか」

ユキは地面に伏して泣いている女にたずねました。

「おつかあ、どうしたんだ、何があったんだ」

「娘がさらわれちゃった」

「さらわれたって、だれにだい」

「西からきたから、ありあ、一夜山の山賊どもだ」

「誰がさらわれたんだい」

「沙都だ。それに亜希、文だ」

「えっ、フミねえもかい。いよいよたいへんだ、ハヤテ、助けにいくよ」

「あいよ。一日に二つもサンソク退治だなんて、おいら思ってもみなかったなあ。」

十二、一夜山の山賊

ユキを乗せたハヤテは、飯綱山から二つ隣の山を目ざして走りました。森を抜け、小川を跳び越え、目の前にあらわれた一夜山は、横に広がった茶色い崖に、いくつもの洞窟がありました。そして洞窟の前の木々には二つ三つと馬がつかがれていました。一夜山の山賊は洞窟を根城にしていたのです。

ユキがハヤテにいました。

「ここで氷雪の竜巻を使ったら、つなかれた馬をまきこんでしまう。ここは、新たな技を身につけたハヤテにまかせようかね」

「あいよ。でも、ユキねえも剣で戦ったらどうだい。」

「剣だとひょんなことで切り殺してしまうかも。た

とえサンソクでも殺したくないな」

「なら、雪の矢っていうのはどうだい。」

「そうか、雪の矢か。そうだ、サンソクの足をねらうとしよう」

「ユキが革袋からだした短剣をハヤテはひだり向きにガキツと噛みました。」

「ハヤテ、どの洞窟にフミねえがいるか匂いでわかるかい」

「だめだ、いろんな匂いがあるってわからない。」

「となればこの一っ手だ。……フミねえ、フミねえ一っ」

「ユキが大きな声で文の名を呼ぶと、」

「なんだ」「なんだ」

と、いくつもの洞窟から男たちが出て来ました。皆、獣の革衣に革沓を履いて、手に剣をもっています。

そして、十人ほどに集まり出た男たちの先頭で、肩を怒らせて進んできた小太りの男が、

「女わらし、なにじに来た」

と吠えました。

「おまえたちを退治し、フミねえたちを取りもどす

ためだ」

「なんだと、しゃらくせい。野郎ども、一人だと思つて遠慮するな、切り刻んじゃえ」

「おおーっ」

と剣を振り上げ山賊が一斉にむかってきたとき、

グルグルグルッ

とハヤテが強く唸りました。

ギョッとして男たちが足をとめた瞬間、ハヤテは山賊たちに襲いかかり、短剣で次々と足の臍をきっていきましました。

「うわっ ギャーッ」

と叫び声をあげて地面を転がり回る男たちを跳び越えて、ハヤテは右手へ走りましました。新たに洞窟から出てくる山賊を迎え撃つためです。

ユキは、左から襲いかかってきた五人の山賊の足に素早く雪の矢を放ちました。矢を受けた男たちがひっくりかえると、そのふくらはぎに二の矢を放つて臍を切りました。

（ハヤテ、雪の矢は大正解だ）

とユキは思いました。

「フミねえ、どこだあーっ」

その声で洞窟から出て来た新手を雪の矢で倒し、

「フミねえ、どこだあーっ」

と大声をあげていると、左手の先から、

「ユキーっ」

と声がしました。

洞窟から出てくる山賊を倒しながらユキが駆ける時、一回り大きな洞窟の口で、クマ皮の衣を身につけて裸足の男が、長い剣を抜いて待ち構えていました。

ユキが走り寄ると、大男もユキに向かって走り寄り、

「女わらし、死ねーっ」

と剣を頭上から斜めに振り下ろしました。それを、さっと後に飛び退いてユキが避けると、剣先が地面の石にぶつかって火花がとびました。両の手の平をかしらに向けたユキが、

「おまえが山賊のかしらか」

と問うた、

「だとしたら、ヒツジめ」

「退治する」

「笑止！」

かしらが踏み込んで左から横に払った剣をユキはうしろに跳んで避け、同時に雪の矢をかしらの両足の太ももに放ちました。

うわっ

と叫んで、かしらが前にどさっと倒れると、ユキは右に跳んで雪の矢でかしらの両足の臍を切りました。それから洞窟にとびこむと、燃えさかる炉の横で文と二人の娘が抱きあってふるえていて、つよく酒のおいがしました。

「フミねえ、だいたいどうぶが」

とユキが声をかけると、顔を向けた文が、

「大丈夫だ、ユキ、大丈夫だよ」

「ケガはないかい」

「おらも沙都も亜希も、ケガはないよ」

「じゃあ、立っておくれ。外に出よう。フミねえたちば、ウヌに乗れるかい」

「乗ったことはねえ」

「なら、歩いてでもよさう」

「外には山賊たちがいるだろ」

「だいたいどうぶ、みんな倒したよ」

「ええっ!」

げんげんな顔をした文でしたが、ユキに続いて洞窟を出ると、山賊のかしらが両足のしもやけもあらわに地面にうつぶしていたので、ユキの言葉は本当らしいと思えました。さらに先には、やはり足がしもやけでぶくらんで動けない山賊や足の臍を切られて地面でのたうつ男たちがいて、そばには短剣をくわえて尾を振るハヤテの姿がありました。

「この男たちも、ユキが倒したのかい?」

と文が訊き、ユキは、

「そうだよ、おいらとハヤテで倒した」

「どうしてこんなことができるの?」

「おいら、フユヒメさまの身内で、ハヤテのおとうはフユヒメさまの家来なんだ」

「フユヒメさま?」

「そう、フユヒメさま。フミねえのムラにはフユヒメさまとニユウドウの伝えはないようだね」

「フユヒメもニユウドウもいま初めてきいたよ」

「フユヒメさまは雪や氷をあやつる北の国の神さま

で、ニユウドウは焰や熱気をあやつる南の国の神なんだ」

「ぶっ、北の国の神の身内だから、ユキは山賊た

ちの足をしもやけにできたってわけかい?」

「うん、雪の矢を放ってね」

「ニンゲンの姿をしているけど、ユキはニンゲンとは違うんだね」

「うん、ちょっとだけ、ね」

話をしながら椎の木村に近づくと、大勢の村人が西の村はずれに集まっています。それを見た沙都と亜希が、

「お、うっ!」

「お、うっ!」

「お、うっ!」

といて走っていき、村の衆の中から走って来た四人と抱き合いました。

「ぶじでよかった、心配してたんだ」

「ほんと、うっ! うっ! と泣いてたんだよ」

「お、うっ! お、うっ! お、うっ! が、うっ! うっ! 亜希がうしろを振り返して、

「あ、ユキって女わらしが助けてくれたんだ」と指差しました。

「あんなちいさな子が?」

「なんでもフユヒメの身内だって」

「フユヒメってなんだ?」

「雪や氷をあやつる北の国の神だっ、って」

「じゃあ、女わらしは神さまの身内だっ、ってことかい?」
「そうだよ、山賊どもの足をすいすいしもやけにしたんだ」

と教えると、それを聞いた村の衆がユキに走りより、

「ユキ、ありがと!」

「女わらし、ありがと!」

と口々にうって頭を下げました。

「ユキは、」

「あ、お、お、困っている衆の助けになるため旅してるんだ。だからみんながよろこんでくれてうれいよ」

といてから文を見て、

「フミねえ、おいらたち「ねから連さま」、一夜山の山賊もやつけたから捕まえておくれっていい」

いくから、これでさよならだよ。フミねえ、元気でね」

そういうとハヤテとともに駆け出しました。その二ツゲンとは思えない速さに、

おおーっ

とごよめきがおどろい、

「なるほど、神さまの身内だ」

と感心する声もあがりました。

連の屋敷に走りついたユキは、あの門番の男に、

「あにい、おいらたち、イチヤサンのサンソクもやつつけたよ。だから、捕えにいつておくれと連さまに伝えとくれ」

と告げるじ、

「なに、一夜山の山賊もか。いま役人が飯綱山入山賊を捕らえに向かっているが、やつらは三十ほどもいると聞いたぞ。それだけで、役所の牢は満杯だ。」

「一夜山の山賊を捕らえたとしても、牢がないぞ」

「じゃあ、連さまにいつとくれ、一夜山の山賊を縛り上げたら木車に乗せ、馬に曳かせて、都のサエモ

ノシヨウさんに届けてって。馬は一夜山の洞窟の周りの木にいつぱい繋がれているよ」

「女わらし、佐衛門尉さまを知っているのか」

「うん。サエモンノシヨウさんの屋敷でウリを食べた。剣術の勝負もしたよ」

「そうか、都へな。連さまにお伝えしよう。一緒にこい」

と横の木戸から中に入っていききました。しかしユキは続かず、木戸に向かって、

「あにい、ごめん。おいらたちはまた旅をつづけるよ。連さまによろしくね」

といつて門をはなれ、ハヤテとゆっくり南への道を歩いていきました。

十三、かつらの峠

その峠は、水が湧き出るちいさな池の北端に、大きな桂の木がそびえていましたので、「かつらの峠」と呼ばれていました。池の東にたつ小屋は、軒先に「もてなし家」の看板をつるす木造りの宿で、麻衣

を着た、頭に毛がない年寄りの源三が一人で暮らしていました。

それでも三月ほど前までは、源三をゲンじい、ゲンじいと呼んで慕った四歳の孫娘の花が一緒でした。しかし、杏の木の実が熟すころ、高い熱を出し、源三の看病も空しく亡くなってしまったのです。

峠には、ほかに家がなく、夜ともなればケモノの吠え声も聞こえて、怖いし、寂しいし、心細いかぎりです。だから源三は日が西に傾くと、道に面したぬれ縁に腰をおろし、家の前をとる旅のものに、

「今夜、泊まっていかなかね。泊まり銭十枚のよ、八枚でいいからな」

とさそうのでした。さらに、子どもが一人で歩いていゆゆものなら、

「わらし、暗くなったら、こん先はあぶねえ。泊ま

つてけ。わらしからは銭はとらんぞ」

と、いいました。

「ですので、夕暮れどきに通りがかったユキとハヤテ、とつせん呼びとめられました。

「おいらたち、夜目がきくし、野も山で獲るのは、

なれてる。食いもんももってる」

とユキが断ると、源三は、

「そんなにいわず、泊まっとくれ。こんな山ん中に一人である年寄りがあわれと思って、話し相手になつとくれ」

とすがりました。ユキはちょっとかわいそうになつて、

「なら一晩だけ。ハヤテも一緒だよ」

「おうおう、もちろんその大きな犬も泊まっとくれ」

「おじい、ハヤテは犬じゃない。オオカミだよ」

「ひえーっ、オオカミ。そいつはかんべんだ」

「おじい、だいいょうぶだ。襲ったりしないよ。な

せなら、おいら、ハヤテと話がでるんだ」

「話がでるぞ」

「そうだよ。ハヤテ、おいらたちを跳び越せ」

ユキがいつなり、後にひかえていたハヤテが後ろ足で地面を蹴って、軽々とユキと源三を跳び越え、くると回って源三の後ろにおりました。その動きを目で追った源三は、

「おおい、オオカミ、おおい、おおい。かしこい

オオカミじゃ。さあ、家に入ってくれ」
とユキたちをいざないました。

その宿は、三八市の連の小屋を横に二つつなげたほどの大きさで、板戸を引き開けると土間があり、二歩ほど先に板の間がありました。その右手中ほどには板の間を二部屋に区切る引き戸があり、目の前の床には炉がきられ、粗朶と薪が左の隅に積まれていました。

ハヤテの足先を麻布で拭き、自分の足も拭いてユキは炉の横にすわりました。

源三は、鉄の箆で炉の灰の中から白い塊を取りだすと、箆でコンコンと叩きました、すると灰が落ちて、赤黒くほてった炭があらわれました。源三は、その上に枯れ葉と粗朶をのせ、ふうふうと息を吹いて火をつけました。次ぎに立ち上がって、炉の上の自在鉤の鉤を下ろして、炉の横に置いてあった木蓋の鍋を鉤にかけました。そして火に粗朶をくべました。

ユキは黙ってそれらのようすを見ていましたが、太めの薪に火がついたので、

「おじい、おいらはユキだよ。これはハヤテ。おじいの名はなんていうんだい」
と訊ねました。

「おらかい。おらは源三だ。源じいとよんどくれ」
「ゲンじいは、なんでこんな山の中に一人でいるんだい」

「おらの家は、ここを治める連さまから代々この宿を任されていてな。旅のもんをとめたり、道に迷ったもんを助けたりしてきたんじゃ。しかし、三月前に一人っ子の孫娘が亡くなつては、それもおらの代でおしめえだ」

「おしまいになつたら、どうなるの」

「連さまが誰かをよこすさ。旅のもんじゃあ、たいせつな宿だからな」

「ゲンじいは、わらしから銭をとらんのので、ずっと元気で宿を続けてほしいな」

「ありがとよ。さあて、シシ鍋が温まつたかな」
と、鍋の木蓋をはぐりました。

「熱くなく、冷たくなく、食べ頃じゃ」

源三は木の柄杓で、椀にシシ汁を盛って、ユキと

ハヤテの前に置きました。

木の匙をつかつて食べながらユキが、
「このイノシシはゲンじいが獲ったのかい」
と訊くと、

「いや、おらじゃねえ。連さまの手下が落とし穴を掘って獲ったもんだ。おらがシシのケモノ道を教えたもんだから、分けてくれたんだ」

「へへえ、落とし穴か」

「旅のもんが落ちりゃあ、大変だから、落とし穴のまわりの木に注意書きの木札を貼ってよお、ほらっ、シシは字が読めんからな、ふあっふあっふあ」

「あははっ、そりゃあ、おいらもあぶなかつたな。ところでゲンじい、クマもいるんじやないかい」

「ああ、いるな。明るいうちは出てこんで、夜に出歩いてるようだよ」

「姿を姿たのっ」

「いや、姿は見とらんが、家の前の畑で菜や豆が食いらされたとき、おっきな足跡が残つた。あ
りゃあ、クマのもんじゃ」

「やつらは山にフナの実やナラの実が少ないと、里

におりて畑を荒らすんだけど、ここはなんてつたつて山の中だから、一番はじめにねらわれちゃうからね」
「ああっ、気持ちいいくらい、きれいさっぱりせんぶ食べやがった。こんちくしょうだ」
ユキは、クマをこの宿の畑に近づけない方法はないかと考えましたが、いい考えが浮かびません。そして源三は、ユキたちに峠のことや裏山の話語り始めました。

夜も大分更けると源三の話も尽きて、みんなは炉の回りに敷いた藁ムシロの上で寝ました。

翌朝早く、ユキは、もてなし家の横の池で顔を洗いました。するとハヤテが、

「ユキねえ、いいにおいがする。」

といて上を見上げました。

「このやさしい香りは、カツラだね。池といい、カツラといい、ここは、汗をかいてのぼりついた旅の衆には、うれしいところだね」

と、やはり見上げたユキがいい、また一つ大きく息

を吸いました。

宿にもどったユキは源三にいました。「ゲンじい、ありがとう。おいちたち、裏山に登ってから、旅にでよう。」

「そうかい、そうかい。ユキはしっかりものだし、ハヤテは見るからに強そうだ。だけど旅ではなにおこるかわからん。この宿に泊まった衆からはいろいろなことを聞いた。この先、気をつけて行くようにな。」

「うん、ありがとう。」

おいち、どんなときでも、ユキねえを守るよ。

かくて、もてなし家を出たユキとハヤテは、北裏の雑木林の細い山道を走り登りました。

着いた裏山のてっぺんは、石積みみの低い土台の上にちいさな木の祠があり、北の空はるかに、ぎざぎざ頭の高い山が望めました。その山では、天狗を目ざす修験者たちが、山を駆けたり、高く跳び上がりたり、谷を跳び越えたり、急な崖をよじ登ったりしているとき、きのこの夜に源三が話してくれました。

「いかにもテングが住んでいそうな山だね。」

樹が茂る、暗めの森でした。

「ニョニョテングになる稽古をしているだろう。森の奥からは小鳥の鳴き声がするばかりだ」とユキがいうと、

ニンゲンの匂いもしない。

とハヤテが応えました。

麓からの山の上への登り坂は、幅がゴンじいの背丈の倍ほどもあり、その両側には間をそろえた杉の巨木がそびえていました。あきらかにニンゲンの手で植えられたものです。

「杉の幹の太さからすると、テングになる修行って、すうすうと昔から行われていたようだね。登ってみようか。」

あいよ。テングかあ、わくわくするなあ。

走り登ると、しばらくして、杉並木の両側に長四角の大きな家がいくつあられまわりました。それらは、地面に置いた大きな石の上に太く長い柱を二十あまりも建て、長く幅の広い板で壁を張り、窓をあけて、山形の屋根で建物をおおっています。一つに四、五十の衆が一度に泊まれる大きさです。

とユキがいうと、ハヤテが、

ゲンじいがいったテングってのが面白かったね。一本歯のゲタつてのをはいて、テングの団扇つてやつをもって、さ。

「そう、赤ら顔で、鼻が長くて、鳥みたいに背中に翼があつて、空を飛ぶんだって。」

ユキねえ、おいち、テングつてやつ、見てみたいな。

「そうだね、あの山へ行けば会えるかな。いってみるか。」

あいよ。

ユキとハヤテは山を走り下り、ナラヤクヌギなどの森の中にもち爪先上がりにつづく山道をさらに走りました。あちこちから小鳥の鳴き声がきこえてきます。そして時折、ノウサギの丸い糞やシカのちよつといびつな丸い糞が落ちていました。

十四、修験者たち

ぎざぎざ山の南の麓は、杉やトウヒやモミなどの

家のまわりの庭では、薪を割る男や、木車をひく男や、水桶を天秤棒で運ぶ男たちの姿がありました。庭端の二本の若杉に綱を張り、洗った麻衣や袴などを干していた太った若い男が、ユキを見つけるや、血相を変えて走ってきて、両手を広げて立ちほだかり、

「だめだ、だめだ、ここは女人禁制だ。帰れ、帰れ」と大声でいいました。

「ニョニョキンセイってなんだい」とユキがきくと、

「女はだめだつてことだ。すぐ帰れ。」

「ええっ？ つまんない。せつかくテングになる修行を見ようつてきたのに。」

「女に見られたら修行どころじゃなくなっちゃう。帰れ。」

そのときユキは、昨夜ゲンじいが話したことを思い出しました。天狗は高く跳び上がることができるということです。それで、

「おいち、ほんとうはテングだよ。それでも帰れとつつかい。」

「なに、おまえが天狗だって、へん、笑わずな」と男がいった瞬間、ユキは、
パッ

と地面を蹴って杉の大木のとっぺんの枝に飛び上がりました。

「ええっ?」

男が驚きの声をあげ、口をあけて木の上のユキを見あげました。ユキはその木から一つ山側の杉の木の高い枝へ、さらに先の高い枝に飛び移ってから、
タン

と枝を蹴ると、くるくる回りながら男の目の前に下り立ちました。

「ね、テングでじょう」

男は目を見開いてユキを見ています。

「このハヤテもテングだよ、ハヤテ、見せておやり」とするとハヤテは、タタタッと十歩ほど後へ走るや、勢いよく走り戻ってきて男の横の太い杉の木に駆け上がり、幹を蹴って左隣りの木の幹に飛び移り、さらに蹴って、斜め右の木の枝に移ってから、枝を蹴り、四つの足を横に広げて男の前にスタッと降り立

ちました。

「ねっ、こんなことできるのはテングだけでしょ」とユキはすましていいました。男は、

「おらにゃあ判断できねえ。お師匠さまを呼んでくるから待ってる。奥へ行くんじゃねえぞ」

といって、右手の大きな家にむかって走っていきました。

ユキねえ、オシシヨウという男は、おいらたちをテングだと信じるかな。

「へっだろっ。ただ、ゲンじいがいったたよね、テングは山を速く走り、谷を飛び、崖をよじ登って。おいらたちはそれができるから。オシシヨウに見せてやることにしようや」

あいよ。

しばらくして、白い麻衣を着流しにして、木の枝を杖とした、長い白髪の老人を先頭に、いずれも麻衣をきりつと身につけた若者三十人ほどが、大きな家から、ユキたちにむかって歩いてきました。白髪の老人は一本歯のはき物をはいていましたから、ユキは、

(やあ、よわった。本物のテングがきちゃったぞ)

と思いました。五歩ほどに近づいた老人が、

「おまえが天狗だと申す女わらしか」

と、ユキにたずねました。

「そうだよ。ユキテングだよ。おじいもテングかい」

「天狗ではない。修験者の真田白雲齋じや」

「ぶっん、一本歯をはいていても、おじいはテングじゃなくて、シユゲンジヤなのか」

「そつじや、一本歯の下駄は山を駆ける修行のため

のもの。さて、女わらし。ぬしは天狗だと申したそ

つじやが、天狗というからにはなにかしらの術が

できるだろっ。わしらに見せてみよ」

「うん、いいよ」

と、こつなり、ユキは、

「ユウッ

と空気を裂き、山道を上にもわかって走ると、

おおーっ

と、驚きの声が若者たちからあがりました。それはそれは、ニンゲンとは思えない速さなのでしたから。走るユキは、その先で一番太いと思われる杉を見

つけるや、幹の高さの半分くらいまで駆け上がり、

トン

と幹を蹴り、両手を大きく横に広げて滑空し、白雲

齋の前に、

タッ

と降り立ちました。

おおおーっ

またしても驚きのどよめきがおこりました。白雲

齋は、

「いや、驚いた。空とぶ術だとは。まさしく天狗じ

や。この目で初めて天狗を見たわ。その天狗さまが、

何故この地にまいられたのでしょつや」

「みんなの、天狗になるための稽古を見たくなってきたんだよ」

「そうですか。ならば手だれの技をお見せしましよ

う、佐助」

と呼ぶと、若者たちのつしろから小柄な若者から出てきて、白雲齋と向きあいました。長い黒髪を背中で束ね、裸足です。とこのった顔立ちの中で、黒い瞳が輝いています。

「佐助、天狗さまにおまえの技を披露せい」
と白雲齋がいつと、

「承知」

と応えて、佐助はかたわらの大杉にとりつき、スルスルスルツとたちまちつべんまで登りつめ、

「ジョン ジョン ジョン ジョン」

と杉から杉へと跳び移りました。跳んで跳んで、坂道のすいぶん上まで行くと、地面に跳びおりて、今度はすこい勢いで体を後転しながら坂道をくだり、白雲齋前で、

スタツ

と片膝をついて止まりました。

「ちうござー」

「キがおどろき感心していつと、白雲齋は、

「佐助は、この山の修験者たちの師範代じゃ。そしてこの者も師範代でな。才蔵」

と名を呼ぶと、みんなより頭一つ背の高い細身の青年が群から出て来ました。やはり長い髪を後で束ね、裸足で、うりざね顔の目は半眼で、なにやらか思うかのよつてした。

「才蔵、おまえの術を見せてやれ」

「承知」

というが早いか、ボンとつしるに一回転した才蔵は、両手を横に伸ばして、グルグルグルグルツとものすこい速さで回転しました。

とたん、地面に落ちていた枯れ葉や枯れ枝が巻き上がり、またたくまに才蔵の姿を包み隠しました。

えっ？！

「キはおどろき、しばらくすると舞い上がった枯れ葉や枝が地面に落ちてきました。そこに才蔵の姿はありませんでした。

「えっ、どこへ消えたの？」

と「キが口をゆるす、

「そごじゃ、」

と白雲齋が右の杉を杖でさし、幹の後から才蔵が姿を現しました。

「へえ、シユゲンドウってすこいね。いつ隠れたのかわからなかった」

「満足したかな」

と白雲齋がいつと、「キは、

「うん。でも……」
「でも、なんだ？」

「ハウウンサイさんは、サステにいやサイソウに以上の、すこい技ができるんでしょ」

「なに、わしの技か」

「見せてほしいな」

「よかろつ。天狗さまの所望じゃ」

そついつと白雲齋は坂道の下方に体をむけ、
「みなは、わしよつしるにさがるいな」といいました。

白雲齋は、顔を左右に動かして、前方に誰もいないことを確かめると、両手を横に広げて、口を大きく開けました。

が、なにも変わりません……。

と、突然、坂道の下先で砂煙がわきあがり、杉並木の枝がはげしく打ち振られて、ちぎれた杉ツ葉が舞い散りました。

「えっ？」

おどろく「キとハヤテでしたが、若者たちからやんやと歓声があがりました。佐助が「キに、

「天狗さま、いまのがお師匠の大技、無音の声です」と、いいました。

「ムオンノ「エ」？」

「そつです。われわれの耳ではきこえない音を、お師匠は口から発し、荒ぶる風を起されたのです」

「へ、すこい技だねえ」

「お師匠以外、まだだれもできません」

「すこいものを見ちゃった」

とつと「キは白雲齋の前でいき、

「おじい、びっくりしたよ。ムオンノ「エ」ってすこいね」

「ほつほつほ、天狗さまをおどろかせたとは恐悦至極じゃわい。修験道に限らず、どんな技でもこつこつと真面目に修行することが大事。たとえ超むずかしい無音の声でも、師の教えを守り、真摯に修行すれば身につく。わしもそつして身につけたのじゃ」

「へえ。それで、いろんな技を身につけた後はどうなるの？」

「めちろ「ちろひの王や貴族や武士や大金持ちたちがこの者たちを雇いにくる。」「こにいる大半の者は、

やがて雇い主の手足となって働くわけじゃ

「そつなんだ。それじゃあ、しつかり修行しなくっちゃね。と」まるでハクウンサイのおじい。おじいたちは困っていることないかい

「困っていることがあったらどうしたと」おじい

「おいら、困っているモンの役に立ちよう、旅をしるんだ」

白雲齋は、「わしは格別ないが」といってから、若者たちを見回し、

「だれか困っていることがあるか。と」いつも目の前の困難を克服するのが、われら日々々の修行なのだ。だが……」

「はいました。すると、ちよっぴり太ってまんまる顔の若者が、

「お師匠、北の谷のサルですよ。修行していると石や木の実を投げてくるんで、やっかいです」

「と」おじい、その右横の若者が、

「そつなんです。先日、角張った石が頭に当たって血が吹き出ました」

「はいますと、白雲齋が、

「サルの石へらい避けられんとは、おぬし未熟だぞ」と叱り、「はあ」と若者が頭をかきました。

佐助が、

「お師匠、竜はあのままがいいんですか。先日通ると、枯れ葉や土ほりきをのせたまま、まだ眠っていました」

「と」おじい、白雲齋は、

「竜は何も食わず何年も眠れるいきもののようにやのう。われらには起きてくれと頼む理由もないし、寝ていてもならかまわんから、眠れるだけ眠らせよおけはよからうと」

「と」おじい、

「おじい、リュウってなんだい」

とききました。

「北の谷のさらに先にある地藏岳の洞穴にすみつきたいいきものじゃ。五年ほど起きずに眠ってある」

「死んでいるんじゃないかと、眠っているのかい」

「そつじゃ、近くに行けば、いびきの音が聞こえるわい。昔はよく、この空を飛んでいたがのう」

「リュウって空をひぶのかい」

「またも湧き上がった驚きの声をあとに、ユキとハヤテは杉並木の坂を疾走しました。途中途中に修行中の修験者の姿がありましたが、ユキたちをとがめる者は誰もいませんでした。いいえ、とがめようにもあまりの速さゆえ、声をかける間もなかったのです。」

十五、これも天狗になる修行

杉並木は、クマザサでおおわれた峠で途切れ、右奥の、まばらなシラカンバの木の中に、山形の屋根をのせた四角い木の小屋がたっていました。

「なんの小屋だろう。社だろうか、見てみよう」

「あいよ。」

「ユキは、小屋の表戸の隙間から中をのぞきました。木の壁に麻衣が四、五枚かかっている、部屋のまんなかの炬から、すすい煙が青白くのぼっています。だが、だれもいません。」

「ハヤテ、こゝは修験者たちがくつろぐ小屋かもしないね」

「おじい、奥へいかせてくれないかい」

「女わらしでも、天狗さまならかまわんだらう。ほれ、これを持っていかれい」

「と師匠は麻衣の袖から木札を取り出しました。そして、

「通行証だ。不信に思った修行者が声をかけてきたら、見せるがいい」

「と」ユキにわたしました。

「ありがとう、おじい。さあ、ハヤテ、先へい」

「と」ユキが駆け出すと、ハヤテがつつき、

「おおーっ」

とユキがいうと、

そつだね、ニンゲンの汗の匂いがする。

とハヤテが相槌をうちました。

峠からくだる道は、これまでの半分ほどの幅で北尾根に沿ってのび、背の低いサワフタギやリョウブやヤマツツジなどの木が茂る道脇には、淡い紫色のヤマアジサイの花や白いちいさな花が皿のように集まったハナウドの花や赤紫の穂のヤナギランの花などが見られました。そしていろいろなチョウが飛び交っていました。

走りながらハヤテが、

ユキねえ、腹がへらないかい。

と聞いて、

「うん。なら、餅をたべるかい」

いいねえ。

「この先に尾根が崩れた崖がある。あそこで食べようぜ」

あいよ。

崖の下には、大きささまの落石が転がっていま

した。中には、ユキの背丈の倍の倍ほどもあるゴツゴツした大石もありました。ユキたちが近づくと、大石を背にして地面に両足を投げ出し、いびきをかいている赤ら顔の若者がいました。

ハヤテがユキにいました。

「このあにも、シュゲンジャなのかな。」

「シュゲンジャにしては、こころ太っているし、麻衣の着方もだらしがないな」

酒くさいぞ。

「シュギョウもせずに、酒を飲んで、寝ているみただね」

すると、若者が薄目をあげ、

「おい、女わらし、こは女人禁制だぞお。もどね、もどね」

と寝ぼけまなこでいいました。ユキが、

「おいら、おじいの許しをもらって」

と聞いて、白雲斎の木札を若者の目の前に出すと、
「なんだあ、お師匠の通行証を、どうして女わらしがもつとるんじや」

「おいらたちがテンメだからさ」

「天狗だつて？」

と、目を見開いて若者がいうと、ユキはトンと地面を蹴って、大石の倍の倍の高さにまで跳び上がり、クルツと回って、スタツと若者の前に降り立ちました。

「おおっ」

驚いて若者が立ち上がりました。

「ねっ」

と、ユキがいうと、

「驚いた、天狗だあ。酔いがいつべんに醒めた」

「あにいは、シュゲンジャなのかい」

「ああ、そつだ」

「寝ていても？」

「おらは体術で天狗になるうとは思っちゃいねえ。女わらし、天狗ってどんな顔じとるか知ってるか」「ゲンじいは、赤い顔で長い鼻をしとるといつとつた」

「だろ。赤い顔じや。だからおらは赤い顔になる習練をしたのんじや」

「顔を赤くするために、酒を飲んだのかい」

「そつだ。だがそれもニンゲンが作った酒じゃない。ニンゲンがつくつた酒を天狗が飲むなんて話はきいたことがないからな」

「じゃあ、だれがつくつた酒なの」

「サルだ。この辺りのサルは酒造りがうまくてな。木の洞にキイチゴやノブドウの実を噛んでためるんだ。それが酒になる。サルの酒を飲むと、このほか気が大きくなってな、度胸がつく。どんなに強いやつが相手でも負けない気持ちになる。矢でも槍でももつてこいつで気分になるんだ」

「だからサル酒を盗んで飲んでるの？」

「盗んでるんじやねえ。天狗になる修行のため、ちよいつと、おすそ分けにあずかっただけだ」

「酒が飲まれていることを、サルが知ったらおこると思うよ。あつ、そうか。さつきちよびり太ったまんまる顔のあにいが、北の谷のサルが石や木の実を投げるといつただけど、あにいがサル酒を盗んで飲むからだね」

「あははっ、そつが、サルにはれていたか」

そのとき大石の上で、「バギツ」と音がして、一匹の大きなサルがユキたちをのぞきこみました。振り仰いだ若者が、

「あつ、こりゃあ、いかん」

というや、太っているとはとても思えない速さで、山道を駆け上がりました。ユキは、

「やっぱりシユナンジャだ。走りが並じゃない」といってから、

「あつ、まずい。ハヤテ、おいらたちも逃げよう。サル酒を盗んだあの男の仲間だと思われたら、石を投げられちゃうぞ」

あいよ。

ユキたちは、たちまちのうちに北の谷を走り抜けました。その先はシラカンバやナラヤクリなどが茂る明るめの森で、奥に三つの峰を見せて長く横たわる山がありました。

「この峰がジソウタケかな。とりあえず道のまま山の麓に向かおうや」

あいよ。

ユキとハヤテは、また走り続け、森の中の小さな

泉の畔で餅をかじりました。

十六、双頭の竜

森を抜けて仰ぎ見た山は、切り立つ崖の山でした。高さはクチバシ岩の倍の倍もありそうです。崖の途中には背の低い木々が疎らに生え、足もとには崖から崩れ落ちた石が森のきわまで散らばっていて、落石が山のように積み重なっているところもありました。

「おいらは右手をさがすから、ハヤテは左手をおねがい」

あいよ。

ユキは落ちている石をよけて、はじけ跳ぶように駆け出しました。しばらくすると、

ユキねえ、洞窟だ。

とハヤテの音が聞こえ、ユキが駆けつけると、その崖の下には、ヒビがいたサル谷の洞窟の倍の倍ほどもある大きな口が開いており、その口を塞ぐように、緑色の巨大な塊がはまっていました。

ユキねえ、これがリュウかい。

とハヤテがいい、ユキは「そうみたいだね」といって塊に近づきました。

グツ、グールツ　　グツ、グガー

塊がいびきをかいています。

上から下まで見回したユキは、塊は、蛇のようにとぐるをまいているのだと分かりました。巨大なところの上に頭が二つのもつており、目をとじています。

ユキの顔より倍もでかい鱗さえある全身は、顔と背が緑色で、腹は黄色でした。顔は馬の面のように長く、鹿のような角があり、裂けた口の右と左に長いひげが一本ずつあります。二つ頭の竜に間違いないようです。

おつそろしいほど、おつきいな。

見上げてハヤテがいました。

「びっくりだね。こんな大きないきものがあるんだ。ハクウンサイのおじい、五年も寝てるっていつたけど、何も食べないでそんなに寝てられるものなのかな」

ふしぎだね。

と、その時、突然、地の底から、

ヴオオオオー

と、不気味な音が聞こえ、次の瞬間、

ズワーン、グラグラグラグラー……

と地面が縦横左右に揺れに揺れました。木々の幹が大きく揺れ、枝ははげしく振れて、

バギバギツ　バギツ

と枝が折れる音があちこちで響きました。

鳥たちが羽音も荒々しく一斉に飛び立ち、地藏岳の崖はあちこちではがれて、

ガラガラガラッ　ドスン、ドスン、ドッスン

と崩れ落ちてきました。が、それより早くユキとハヤテは洞窟の前から森に飛び込むと、太いミズナラの根元に身を寄せました。

と、洞窟の上部の崖がめくれるように剥がれて、

ガラガラガラガラッ　ドスン　ドスン……

と大量の落石となって崩れ落ちました。

「たいへんだ、リュウが生き埋めになった」

ユキねえ、まだ揺れてる。出てはあぶないよ。

「でも、早く助けなくっちゃ」

ユキが革袋を背からおろし走りよると、竜の洞窟は、大量に崩れた崖ですっかり埋まり、竜の姿は見えません。ユキは、洞窟があった場所にむかって、「おーい、リュウ、だいじょうぶかあ、だいじょうぶかあ、リュウ」

と声をかけましたが、返事はありません。すぐさま積もった落石の上に駆け上がり、大石を持ち上げては森の方に投げつけました、

ハヤテが崖の上を見ながら、用心深く近づいてきて、いいました。

ユキねえ、リュウはだいじょうぶだろうか。

「わからない。でも、崖から落ちた岩に直接あたってはいないから、だいじょうぶじゃないかな。けど早く掘りださないと、息ができなくなるかもしれない」

そう聞いて、ハヤテも積もった落石にのぼり、石をくえては首を振って、森の方に投げつけました。

また一つ、大岩を投げつけたユキがいました。

「おいらたちだけで石をどけてたら、明日の朝になっても、洞窟は現れないかもしれない」

のみがある。洞窟の口を塞いだ落石をどけて、リュウをたすけておくれ」

するとサルたちはいつせいに崩れ落ちた石に取りつき、大きな石は、大ザル三、四匹が力を合わせて持ち上げて森のふちに運び、中ザルは崖下から森に端まで一列にならぶと、先頭から手わたしで中ぐらの石を運びました。小ザルはちいさな石を拾っては森へ投げました。ユキは大ザルたちが持ち上げられない巨石をもち上げて森のふちに運び、ハヤテは落石をくわえて森のふちへ跳びました。

やがて積もった落石の隙間に竜の緑色が見え、さらに石を除き続けると、とぐろをまいた竜の全身があらわれました。あちこちに切り傷があります。そして血でしょつか、緑色の液体がつつすら流れ出ています。

その時、竜の右側の頭が首を持ち上げて、右目を開けました。そして、

ん？ なにがおこったのだ。

と重々しい声でたずねたので、ユキが、

「地面が激しく揺れて、崖の壁が崩れ落ちて洞窟の

だれかに助けてもらおうかい。

とハヤテがいったとき、森のきわに数匹のサルがやってきました。気づいたハヤテが、

ユキねえ、サルだ。気をつけて、やつら、石を投げてくるかもしれない。

と叫びました。とたんに身構えたユキですが、ふつと、サル谷の長老エンジュからもらった金色の笛を思い出しました。

「そつだ、サルだ。サルたちに助けてもらおう」

革袋へ走ったユキは、ちいさな皮袋から金色の笛を取り出すと

プーーーーーッ、プーーーーーッ、

プーーーーーッ、プーーーーーッ、

と吹きました。すると先ほどのサルはもちろん、木の枝を飛び移ったり、地を走ったりして大ザル、中ザル、小ザルたちが三十あまり、ユキの周りに集まって来て、尻を地面におろしてユキを見あげました。ユキは、エンジュからもらった金色の笛を右手でかけ、大きな声でいいました。

「長老エンジュの笛の音で集まったサルたちよ、た

口を塞ぎ、リュウよ、おまえは生き埋めになったんだ。だから、おいらたちとサルたちが岩や石をどけて、おまえを助け出したんだ」

そつか、それはそれは、かたじけない。眠っていたから気がつかなんだ、岩壁が崩れたのか。ん？ あちこち痛いな。

「地面に落ちて跳ねた石が体にぶつかったみたいだね。緑色の、水みたいなのがにじみ出ているよ」とユキが教えると、

だいじょうぶだ。じきに止まる。

「動けるかい。動けるなら、早く洞窟から出ようや。もしもまた、地面がゆれたら、またも生き埋めになっちゃう」

そつだな。

というと竜は左目もあけて首を伸ばし、とぐろをほどきながら、空へ斜めにのぼっていききました。その時、もう一つの頭が首をもたげ、両目をあけて、

兄弟、なにがあつたんだ。下にサルがいっぱいいるぞ。

といました。

地震で崖が崩れたようだ。洞窟の口が塞がれて生き埋めになったわしらを、そこに居るサルや女わらしや、犬が助けてくれたらしい。

なんだって？。

もう一つの頭は振り返って崖を見ました、そして石がどかれた洞窟の口を見るや、

いやあ、ありがたい。みな衆、礼をいうぞ。

といました。

「ユキは、サルたちにむかって、

「サルみんな、リュウはだいたいしょうぶだ。ありがとう。いへるうさま。森に戻っていいよ。」

という、サルたちは一仕事をやり終えたよるこびからか、とび跳ねながら森に帰っていききました。

「ユキは、空に浮かぶ竜にききました。

「リュウよ、なぜこの洞窟で寝てたんだい。」

竜の国では洞窟と湖が竜のすみかなのだ。

右側の竜の頭が応えました。

「二つ頭のわしらは、ちいさいときから異端だの醜いだのといじめられてな、それが辛くて体も大き

くなった十五の歳に竜の国を去ったのだ。そしてここより東の湖で魚たちと静かにくらしただが、その湖を性格の悪い一つ年上の緑竜にとられ、しかたなくこの洞窟を見つけて住みついたのだ。

「リュウリュウ。」

緑色の竜だ。わしの倍ほどでかくて、おどろ

くほど力が強かった。精いっぱい戦ったが、湖から追い出されてしまった。

「いじわるなことだ。」

もう百年になるかな。

「どうして、リュウリュウはおまえの湖を奪ったんだい。」

わしらがいた湖は、この辺りで一番広く深い。

魚もいっぱいおる。やつは魚を好んで食うのだ。

「リュウは、魚を食べないのかい。」

「わしらが喰らうのは早朝の露。魚は食わぬ。」

「カスミかあ。食べても力がつくとは思えないけど、カスミでも、百年も食べれば、体は大きくなり、力も強くなったんじゃないかい。湖を取り返そうと思わなかったのかい。」

魚を食った緑竜は、さらに大きく強くなってるはずだ。そう思うと戦う気は起きん。

「そうだ、いいことがある。リュウの戦いを、おいらたちが応援していいかい。」

ふん、ニンゲンの女わらしになにができるというのだ。

「考えがあるんだ。応援していいかい。」

なんとでもやってくれ。

「じゃあ、それでまっしてね。」

と竜にいつからユキは、

「ハヤテ、サルの酒を見つけてよ。」

あいよ。

そうです、ユキは、サル酒を盗み飲みしていた修験者の男が、「サルの酒を飲むと気持ち大きくなって、度胸がつく」といつていたことを思い出したのです。

「ユキたちが森に入ると、先ほどのサルたちでしよう、数匹がユキに気づいて頭をさげました。そこでユキはいました。」

「みんなが助けたリュウに、飲むと元気が出るサル

酒を飲ませたいんだ。おまえたちのサル酒をリュウに分けておくれでないかい。」

するとサルたちは、

「キャツ、キャツ、分かりました。」

といて、木々を飛び渡って奥に消え、しばらくすると四十匹ほどの仲間と、大きなフキの葉を丸めた器にサル酒をいれ、こぼさぬよう両手でささえてゆつくり歩いて運んできました。ユキはサルたちを空に浮かぶ竜の下にみちびくと、竜にむかって、

「リュウよ、サルたちの酒は、呑めばことのほか気が大きくなって、度胸がつくぞうだ。さあ、サル酒を呑んで度胸をつけとくれ。」

といました。リュウは、

「呑めといわれれば呑むが、そんなものでほんとうに度胸がつくのか。」

といいながら空からゆつくり下りて来ました。

「ユキはサルたちを見て、

「サルみんな、間を開けて二列に並んどくれ。」
といてサルを二列に並ばせ、竜にむかっては、

「リュウよ、手前のサルから後へ順に酒を呑んでい

つておくれ」
といいました。

サルたちが、フキの器を目の上に持ちあげると、
竜の二つの頭はそれぞれサル酒を呑み始めました。
そして、

うまい！これは元気がでる。

と竜の二つの頭が声をそろえ、一匹目のサル酒を飲
ほすと、竜の緑色の鱗のふちに、ほんのり赤みがさ
しました。二匹目を飲み干すと赤みが鱗全体に広が
り、三匹目以降はどんどん赤みが強く鮮やかになっ
ていき、すべてのサルのサル酒を飲み干した時には、
真っ赤にキラキラ輝く竜となりました。それを見て、
キャツキャツ キャツキャツ
サルたちが大喜びで手をたたきました。

ユキが双頭の竜にいいました。

「すごいぞ、リュウ。頭から尾の先までピツカピカ
の真っ赤だ。見るからに強そうだ。どうだい、リョ
クリュウと戦う気になったかい」

おおっ、まかせておけ。戦う気が体中に満ちて
おるわい。

「リュウよ。おいらは誰かの役にたとうと旅をして
いるんだ。助太刀するよ」

わしらは子どもや女の竜じゃない。れつきとし
た青年の男竜だ。ましてやニンゲンの女わらしの助
太刀などこんりんざい無用だ。

「じゃあ、助太刀はしない。ただし、サル酒をあた
えたリュウがしっかり戦うかどうか、見届けるよ」
というが早く、ユキが竜の背に跳び乗ると、

いいだろう。さあ、その犬も乗ってくれ。

「ハヤテは大じゃない。オオカミだよ」

おおっ、オオカミか。まあ、いい。さあ、乗っ
た、乗った。

ハヤテがユキの前に跳び乗り、尻を下ると、竜
はぐん、と大きな身体をよじって大空に飛び上がり
ました。高く速く、竜は風を切って湖を目差して東
にむかいました。

「リュウよ。おいらはユキで、これはハヤテだ。リ
ュウに名はあるかい」
とユキがきくと、

ああ、双頭と呼ばれてた。

「ソウトウッ、」

ああ、二つ頭の竜だからな。

十七、決戦 赤竜 対 緑竜

高い山並を越え、草原を見下ろして飛んで進むと、
緑が広がる森の中に濃い紺色の水をたたえた大きな
湖が見えてきました。

あれが、わしらの湖だ。

「ソウトウよ、湖に近づいたら低く飛んでおくれ。
おいらたち、飛び下りるから。」

承知した。

竜が木々のてっぺん近くまで下がると、ユキとハ
ヤテは地面に飛び降りて、湖のふちにむかって走り
ました。

双頭はそのまま湖の上を遙か遠くまで飛んでい
き、頭から水の中に飛び込むと、ややあって、飛び
込んだあたりの水面が波立ち、次いで大きく盛り上
がった、とたん、

バツ

と水しぶきを大量に空中へ吹き上げて赤い竜の双頭
と、それより倍ほど大きな緑竜がからみ合いながら
水面から飛び出て、上空に舞い上がりました。

ユキたちからはずいぶん離れた湖上での戦いでし
たが、遠目がきくユキとハヤテには二つの竜の戦い
の様子がはつきりと見えました。

「ソウトウ、頑張れーえ」

ユキが叫び、ハヤテが、

あっ、緑のやつがソウトウの二つのあたまを右
腕でつかんだ。

といい、ユキは、

「ソウトウ、やつの腕を食いませれー」

と応援しました。

緑のやつは爪で、ソウトウの二つの頭から緑の
血が吹き出てる。やつは残る頭も左の腕でつかもう
としている。あぶない！

「よし、助太刀だ」

というユキは、遙か遠くの双頭の竜にむかって大
声で、

「おーい、ソウトウ、おまえを助太刀するんじゃない

いぞ。おいら、湖の魚たちのために戦うんだから」といふなり、緑竜の頭にむけて前に伸ばした両手の手のひらを、ぱっとひらきました。とたん、ユキの手から雪の矢が二つ一直線に飛び、緑竜の大きな頭に当たりました。が、矢は、

カンッ カンッ

とはじきとびました。

「おおっ！ 竜の鱗って固いんだな。おいらの雪の矢がはじきとんだぞ」

するとハヤテが、

ユキねえ、大変だ。ソウトウを放り投げて、緑の竜がこつちを向いた。

と叫び、同時に緑竜が、天を裂くような大声で、

よくも竜同士の争いの邪魔をしてくれたな。遠目にはニンゲンの女わらしのように見えるが、女わらしだとて容赦はせんぞ。

というなり、口から火炎を吐き、猛烈な速さでユキたちに迫ってきました。竜と竜の戦いでは互いに封じていた火炎を、竜ではないユキだから吐き出したのでしよう。

しかし、その火炎が届くより早く、ユキは左足を軸に右足を蹴って回り、氷雪の竜巻を噴き上げました。火炎と氷雪の竜巻が湖の上でぶつかるや、

ピカピカピカッ

と空に稲妻が走り、

ドン ドッドドン

と湖に雷が落ちました。ユキはさらに速く強く氷雪の竜巻を噴き上げて緑竜に向かい、そして迫り来た火炎もろとも緑竜の体を氷雪の竜巻に巻き込みました。

グギヤアーッ

悲鳴が山々にとどろき、ややあつて、氷雪の竜巻が緑竜を上空に放り投げると、その緑竜の腹を目がけて、二つの頭をそろえた双頭が思いっきり体当たりしたからたまりません。

グエツ

と一声にぶく発して緑竜は北の空へはじき飛び、緑竜の口から白く光るものが飛び出て、北の森に落ちていく様子を見たハヤテが、すぐさま駆け出しました。

緑竜を放り上げた氷雪の竜巻は次第に薄く小さくなって消え、ユキが湖岸に姿をあらわすと、双頭が空からユキの前に降りてきて、

ユキよ、ありがとつ。湖に魚たちの代わって礼を言う。しかし、あのような竜巻をおこす、おぬしは、ニンゲンではあるまい。なにものなのだ。とたずねました。

「おいらはハナサトムラのユキ。だけど、本当はフユヒメさまの妹の子、サトユキなんだ。

ええつ、フユヒメの妹の子。ああ、それで雪と氷の竜巻を。納得いたしました。

「ソウトウよ、リョクリユウは、ひどいしもやけになつてはすだから、すぐにはもどつてこれないはずだが、いつの日かまた襲ってきたときは、サル酒がなくても勇気をもって戦つておくれ」

はい、ユキさん。先ほど兄弟力を合わせて緑竜の腹にぶつかったのですが、思った以上の威力がありました。なので、湖の底で力を蓄え、たとえ体があいつより小さくても兄弟力を合わせて勇気をもつて戦います。

と双頭がいったところへ、ハヤテが白く光るものをくわえてもどつてきました。そして、口を開いて光るものをユキの前の地面に置きました。それはユキの手のひらの倍の倍くらいの大きさの、白く光る玉でした。

あつ、それは。

と双頭が驚きの声を上げ、

「知っているのかい」

とユキが訊ねました。

竜王の玉です。竜の国の秘宝の一つで、身に入れると体が見るみる大きくなり、力は倍にもなります。そうか、あいつが大きく強かったのはこの玉を呑みこんでいたからにちがひありません。

「じゃあ、この玉を、ソウトウも呑んじゃうといいや」

それはできません。竜王の玉は本来、竜の国の王宮にあるべきもの。竜王以外の竜がもつものではありません。

「じゃあ、あいつが呑んでいたのはなぜだろっ」

双頭は、

「どのようにしてかは分かりませんが、おそらく縁
竜は、この玉を王宮から盗んだのでしょう。だから、
竜の国を出て、わしらの湖に潜んだのかもしませ
ん。いずれにしても、わしらはこれからこの玉
を王宮にお返しにまいります」

と、右腕で玉をグッと掴みました。

すると八ヤテが思案顔でいいました。

ユキねえ、ソウトウが王宮に玉を持っていつた
ら、ソウトウが玉を盗んだと疑われないかい。

「ほんとだ、疑われちゃうよね。なら、玉がどこに
あったか、だれが呑んでいたか知っているおいらた
ちが、王宮に一緒にいこうじゃないか」

そしてユキは双頭に話しかけました。

「ソウトウよ。その玉をリョクリユウが呑みこんで
いたことを、王宮のだれも知らないんじゃないかな。
知っていれば、追っ手がこの湖も調べにきているは
ずだから」

おそくそくそつたるじ。

「玉が盗まれたことに気づかない王宮に、ソウトウ
が玉を持っていったらどうなる？ 真っ先にうたが

われるし、本当のことをいくらいつても、信じても
らえないかもしれない」

それは困る。

「だから、玉がリョクリユウの腹の中にあつたこと
を知っているおいらたちが一緒に王宮へ行くよ」

それはありがたい。ならば、わしらの背に乗っ
てくれ。

ユキと八ヤテが双頭の背に跳び乗ると、双頭は
重々しい声で、

さあ、兄弟、竜王さまの王宮へ出発だ。

というなり、体を大きくくねらせて、大空に舞い上
がりました。

ユキ(三)おわり